
異世界には刀の花束を【改訂版】

イタズラ小僧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界には刀の花束を【改訂版】

【Zコード】

Z3283T

【作者名】

イタズラ小僧

【あらすじ】

神林 龍哉は、ただ剣術が優れ、ただ身体能力が高く、ただ頭の回転が早い青年だった。

彼はいつのまにやら異世界へ。

こんな、ただ剣術が優れ、ただ身体能力が高く、ただ頭の回転が早いだけの青年が魔法あり、精霊あり、魔獣ありの異世界で生きていけるのか？

※改正中につき、更新ストップ【残り10話】

・・・・・と、純粋には喜べないデス。

細かいことはあとがきにて。

8 / 12

綺麗に掃除をされている部屋。

その部屋の本棚には、驚くほどに多くの本が存在していた。

本棚には取り出しやすいように、本の間に若干の余裕があるひとつ並べられている。

そのため、多すぎた本は入らなくなつたようで、机の上にも本が山を作っている。

窓からは、気持ちのいい日光が降り注いでる……訳ではなく、生憎の曇り空。

雨が降り出しそうな様子ではないが、天気がいい、とは言い難い。しかし、暑い昨日や一昨日に比べれば、逆に涼しくていい気候だと言えるだろう。

もやり、と部屋に置いてあるベッドの上で何かが動く。

言つまでもなく、本が満載であるこの部屋の主にあたる訳なのが、現在時計が示している時刻は午前4時30分を少し回ったところ、かなり早い時間である。

あまりにも早いので寝返りかとも思えるが、じつやり違つてしまふ。気付けば部屋の主は起き上がり、クローゼットから動きやすそうな服を取り出す。

すぐにその服に着替えると、わざと部屋を出て行ってしまった。

部屋から出ると微塵の迷いも見せずに、一直線へと階段へ向かう。廊下にある窓からは、雲の隙間から僅かばかり顔を出している太陽の様子が覗える。

標準的なものよりも、少し急に思える階段を手慣れた様子で降りる。

途中でギイと階段が鳴るのは、この家が長年の歴史を積み重ねて

きた証拠だらう。

まあ、住むのには何ら問題がないように、工事はしてあるようではあるが。

周りに置いてある物には見向きもせずに、真っ直ぐに玄関へと向かう。

足取りは、軽快という感じではなく、かと言つて氣怠さを感じさせるものでもない。

決まつた歩幅で音も立てずに進んでいくそれは、感情のない機械

のようと思える。

そして、機械的な動作で靴を履くと玄関を開けて外へと出る。外は曇りと/orいこともあり、昨日からは考えられないほどに涼しいものである。

正面に門があるが、そちらには向かわずに中庭だと思われる方へと足を運ぶ。

足取りは相変わらずのものである。

地面で跳ねている数羽の小鳥ですらその機械的な歩みを生物のものだと認識出来ず、歩みが近づいていつても飛び立つて逃げ出すようなことをしない。

歩いて向かう先には大きな建物があった。

先ほど出てきた母屋よりは幾分か小さいが、それでも十分に大きいと言える建物。

見たところでは、こちらは母屋よりも後に作られたようで建物の傷みは少ない。

建物の入口の前に立つと、ゆっくりと深呼吸をした上で建物の扉へと手を掛ける。

ガラガラと車輪が回る音を立てながら、建物の引き戸が開く。

建物の中は、床が綺麗に清掃をされており壁には竹刀と木刀が並んでいる。

道場の最奥部には“？林流”と書かれた大きな看板が掲げられて

いる。

看板は見るからに古そつた物であり、母屋より古くに作られた物だと推測できる。

ここは所謂道場と呼ばれるよつた鍛練を目的とされた場所であった。

“？林流”と書かれた看板の下に1人の老人が鎮座していた。

不動。

戸が開けられたのだが、それにも少しの反応も示さずに老人はそこにあつた。脇に2本の竹刀を置いた状態で、眼を瞑り何かを待つているようである。

戸を閉め、老人の方へと踏み出ると、静寂に包まれていた道場の空気が一変する。

先ほどまでの朝の静けさを感じさせる厳肅な雰囲気は一瞬にして霧散し、逆に激闘を繰り広げている戦場を彷彿とさせる濃く粘り着くような殺気が辺りを包み込む。

しかし、一步を踏み出した機械的な歩みは何事もないよつに進んでいく。

中庭で跳ねていた数羽の小鳥たちですが、己の生命の危機を感じ即座に飛び立つて逃げ出すよつた異様な殺気の中を止まることなく、平然と歩いていく。

そして、老人から5mくらいに来たときにその歩みが止まった。その場に立ち止まると、入口を感じていたのとは別次元の殺気を感じる。

幾千もの刃が、今にも己を貫かんとしてる幻視すらも見てしまいそつた程の殺意。

いや、そんな言葉もこの殺気を表現する言葉としては生ぬるいと言える。

それ程の恐ろしい殺氣が間違いなく老人一人から発せられていた。

老人が脇に置いてある竹刀の内、1本を徐に掴み、前に向かつて投げる。

当然、目の前にいる人物の許にへと竹刀は届き、そのまま腰に付け構える。

右足を前へと出し左足を少し下げ、右手を柄の部分へと置き左手は竹刀を支えるような位置にあり、右肩が若干下がった状態で突進しようとしているようにも見える構え。

老人は眼を未だに開かずに、脇に置いてある竹刀へとゆっくり手を掛ける。

しかし、目の前の人間はそれを待つてはくれないようだった。

老人が竹刀へと手を伸ばす動作を行うと同時に、老人へと一気に斬り込む。

「疾しつ」

刹那、居合いが放たれる。

竹刀は円を描くように、左斜め下から右斜め上へと空氣を切り裂きさく。

竹刀では抜刀術など出来ないようなものなのだが、あまり関係はないようだ。

老人は高速の居合いに対して、遅れることなく竹刀を構えることで一撃を受け流す。

まるで、その軌道を予測していたのかと疑いたくなる程に正確に居合いを捌さばく。

竹刀は力をそのまま流され、特に抵抗を受けることなく振り抜かれる。

居合いが放たれてから、振り抜くまで1秒あつたか分からない刹さ那の出来事である。

「うん、無理だ」

そこで初めて“彼”は声を発すと、竹刀の切つ先を下に向けて戦意がないことを表す。

声色は愉しげとも諦め気味とも受け取れ、表情は苦笑をしている。彼の声を聞いた老人は眼を開き、顔を確認すると竹刀を最初と同じように脇に置く。

先ほどまでの殺氣は全く感じらず、逆に親しみやすそうな雰囲気を感じられる。

「またか、お前はもう少し頑張らんか」

「いや、居合ののみで一太刀浴びせるとか無理だから。ほぼ型が限定されてて、太刀筋とかモロバレだから」と言つて、居合いつて奇襲か奇襲対策用だから

彼はそう言つと、床に正座をして竹刀を脇に置く。表情は先ほどの苦笑から、もつと柔らかい二二二二としたものに変わっている。

居合の放つたときの冷酷とも言える表情からは想像が出来ないものである。

「^わ儂ならやれる」

「年季を考えてものを言おうか」

客観的に2人の関係を考えてみると、兄弟だといつのはあまりにも無謀であり、親子だといつにはかなり無理があり、祖父と孫だといつのが一番納得が出来る。

それを考へると、その歳でそれだけ動ける老人は大概だと言えるのだが。

「そもそも遊技ゲームをしよう、と持ち掛けたのは、お前じゃねりうて

はあ、と軽くため息をつきながら、老人は彼に對してジト目を向ける。

しかし、彼は何處吹く風とばかりにその視線を完璧に無視をしている。

どう考へても、先ほどの攻防を演じた2人には見えない。

己の命と誇りを賭けた本気の真剣勝負という印象を受けた先ほど出来事は、この2人にとってはただの遊びと同等の出来事に過ぎなかつたらしい。

あれが遊びだと言つのなら、日本の剣術のレベルは相当に高いようを感じられる。

しかし、剣術はほとんど廃れてしまい、今や剣道が主流となつてきている。

と言つても流派は残つているのだが、剣術の向上を田指している流派は僅かばかり。

他はあくまで流派を残すことを目的とし、剣術の向上を田指しているとは言い難い。

数十年としないうちに、剣術は衰退の一途を辿ることは明白であった。

「んー、知り合いともだちが、縛りゲーつりゲー？」が面白いと言つてたから、試してみたんだけど……これのどこが嬉しいんだろ？」

これが、彼 神林 龍哉かみばやし たつやの一般的な1日の始りである。

午前7時12分。

龍哉は自宅から約5kmも離れている学園へと歩いて出発をする。登校だけで凡そ1時間ほど掛るだが、龍哉はあまり気にしているいようだ。

早朝に廊下から見た太陽は雲で完全に隠れ、全体的に暗くなつたよつに感じられる。

しかし、太陽が隠れても乾いた風はどこか暑さを連想させる。未だ、夏の中盤に差しかかつたところでこれから更に暑さが増していくと思われる。

そんな中で龍哉の足取りは、非常に重い。

道場に向かつて歩いていた時よりも、人間味があり氣怠さを感じとれる。

かといって、歩く速度が遅いかどうかとは別問題で、常人の早歩き程度はある。

「はあ」

龍哉はほほ誰も居ない住宅街を、ため息をつきながら歩いていく。その様子は、だらけきつた連休を明けたばかりの会社員、という表現が似合う。

まあ、ただ単に学校に登校するのが嫌でため息をついているだけなのだが。

成績が悪い、虚めにあつてている、体育祭で憂鬱だ、とか言つわけではない。

成績は上位にランクインしているし、ある程度はノリノリケーションを取っている。

さらに、身体能力は学園トップと言つても過言ではないレベルで

ある。

先生からの信頼も厚く、龍哉に任せておけば大抵のことは大丈夫、という共通認識まで存在し大抵の場合は新任の教員が龍哉のクラスに割り振られるほどだ。

主に龍哉が新任の教員をフォローをする的な意味合いで。なぜ、そんな特に問題のなさそうな青年が嫌そうに学校に行っているかと言つと

単に“つまらない”のだ。

龍哉は退屈を忌み嫌い、娛樂を生きる糧としている。

無論、学園の勉強が嫌だと思っているわけでも面倒くさいと思つているわけでもない。

知識が増えること自体は、逆に龍哉にとつて歓迎すべきことである。

では、どうして“つまらない”と龍哉は思つているのか。

それは一種の病氣に近い、いや、病氣と言つても差し支えはないものであった。

初めはあらゆるスポーツに手を出し、次に種別を問わずに本を漁り始め、さらにはパソコンを購入し、節操なしにありとあらゆる世界中の娛樂を探した。

それでも、龍哉が氣に入る娛樂を見つけることが出来なかつたのである。

そもそも、龍哉がここまで娛樂を見つけられないのか、その生い立ちに原因があつた。

龍哉は元々、父親、母親、妹、そして龍哉の4人家族で生活をしていた。

龍哉の父親は大企業に勤めており、龍哉は別段不自由もなく生活を送ることが出来た。

また、2つ離れた妹や母親とも仲が良く、時々父親と母親がどうでもいい小さなことでケンカをするが、それも妹の仲裁によりすぐに仲直りするような平和な家庭であった。

そんなある日、龍哉たちの家族を悲劇が襲う。

交通事故だつた。

原因是気温低下による道路にあつた水たまりの凍結により、車がスリップしたのだ。

龍哉たちが乗っていた車は、手すりをなぎ倒し橋の上から河川に転落をした。

龍哉と父親は車から抜け出すことに成功したのだが、母親と妹が抜け出せなかつた。

その時、父親は龍哉に先に川岸に行つて大人を呼ぶように指示をして、自分は未だ沈んでいる車の中に入るであろう母親と妹を救出するために川に潜つた。

しかし、水が凍るような寒さの中で川に潜るのはあまりにも無謀であった。

流れが速いわけではなかつたが、父親が再び川から顔を見せることはなかつた。

その後、龍哉は警察に保護されることとなる。

この件は特に事件性もなく、完全に事故として処理されることになつた。

両親を亡くしたので、龍哉は親戚が預かることになるのだが、ここで問題が発生した。

龍哉の身柄を引き取りたいという申し出が100件以上も殺到したのである。

田当ては当然、龍哉の父親の遺産……という理由ではない。

無論、龍哉の父親が考えられないほどに莫大な遺産を残しているのは違いないのだが、自称親戚達の本当の狙いは社会的に高い地位を得ることにあつた。

全員が全員ではないが、申し出の7割は間違いなくそういう意図であった。

龍哉の父親は大企業に勤めている、と言つたが正確に言ひなれば、重役を担つていた。

その発言力は高く、下手をしたら副社長など軽く無視を出来るほどである。

その子供を引き取つたとなれば、必ずと会社の上との繋がりも増えることになる。

そうすれば、引き取つた自分の地位は確約されたものになる、と考えたのだ。

もう一つ、元より神童とも麒麟児とも呼ばれている龍哉を引き取ることにより、自身の家系の将来的な保険をしておくといふ意味合いも含まれていた。

そして、龍哉はその100件以上の保護の手を全て断つた。当時、まだ幼かつた龍哉に自称親戚達の汚い思惑が理解出来たわけではない。

単にショックだったのだ。

昨日まで、話し、遊び、笑い合つた人間^{ひと}が、たつた一晩で肉塊に成り果てたのだから。

龍哉は聰い子だった。

“死”というものを間違えずに正しく認識できる程に聰い子だった。

そう、ただそれだけだったのだ。

“死”というものを正しく理解することが出来る頭脳があるからと言つて、自分の家族の死に耐えられるほど幼い龍哉の精神は成長をしていなかつた。

その精神は脆く、纖細で、日々を満足してきた龍哉のソレはあまりにも弱かつた。

どこかで生命は尊いものだと気付いておけばよかつたのかもしれ

ない。

どこかで叶わない望みに出合つておけばよかつたのかもしれない。
どこかで深い絶望を知つておけばよかつたのかもしれない。
しかし、それも遅かった。遅すぎたのだ。

龍哉は親しい者がいるのを恐れ、近くに命があるのを恐れ、関わりのある命を恐れた。

どんなに素晴らしい輝きを持つ命であつたとしても、次の瞬間に田の前から消えて無くなつてもおかしくない程に脆く儂いものだと知つてしまつた。

そして、田の前から命が消えてしまつ恐怖や悲しみを避けるために、人との関わりを避けるのよつになつたのも、仕方のなかつたことだと言えよう。

龍哉はショックの中でも自身のことを冷静に理解できていた。

もし、もう一度でも自分の親しい人が死ぬよつなことがあつたとしたら、龍哉という人間の精神は間違いなく一度と戻れないほどに完全に壊れてしまつだらう、と。

その後、ちょっととした一悶着の後に龍哉は今の神林家に引き取られることになるのだが、詳しいことは話すと少々長くなるので別の機会にでもしようと思う。

神林家に引き取られた龍哉は、がむしゃらに強くなることを田指した。

引き取られた神林家は道場を営んでいたために、強くなる環境は整えられていた。

力があれば大切な者の命を守れると信じて、真摯に剣術に取り組んだ。

龍哉は神童と呼ばれるだけの才はあつたため、実力は急激に上がつていた。

その成長速度は、神林家の流派　？林流の師範である神林　竜

玄も舌を巻く程だ。

今まで竹刀すら碌に握ったことも無いような少年が、竹刀を持ち始めて僅か4年ほどで？林流の技を全て制覇したのだから、その驚愕は予想し得ないほどだつただろう。

しかし、ある日、龍哉はふと立ち止まつてみた。

神林家に引き取られてから今までただ強くなること 大切な者を守ることだけを考えて、ひたすらに真っ直ぐ走ってきた龍哉が初めてその足を止めた。

そして、気付いた、いや、気付いてしまつた。

俺には、守るべき人がいないのだと。

それは当然のことであつた。

ずっと剣術に打ち込み、学校ではあまり積極的にコミュニケーションを取ろうとしない龍哉に、守るべきほど親しい仲の友人など出来るわけもなかつた。

無論、龍哉を引き取つてくれた神林家の人達が大切ではない、ということではないのだが、神林家の人間は総じて龍哉並の異常な強さを持つていた。

事実、神林と言えばここら一帯の暴力団は決して手を出さうとしない家系であつた。

その中でも、この当時は最も弱かつた龍哉が守るべき相手など当然いないのだ。

そこで龍哉は親しいと思える人が出来ないかと、学校でも積極的に生徒会や行事などに参加していたのだが、誰も龍哉と本当の意味で仲が良くなる者はいなかつた。

決して性格が合わない訳ではない、大きく常識が欠落しているの

でもない。

そして、長年に渡つて真剣に考えた末に龍哉は答えを見つけたのだ。

ああ、俺は何にも愉しく思えないんだ。

今まで遊びというものは妹と以外は誰ともしたことがなく、何が楽しくて何が楽しくないのか、龍哉には正常に判断することができないでいた。

いや、訂正しよう、龍哉は恐れていた。

本人は無自覚であつたが、無意識下で楽しさを感じることをとても恐れていたのだ。

楽しいことはいつか終わってしまい、必ずその後には悲劇があるのだと。

交通事故による一種のPTSD 心的外傷後ストレス障害であった。

それにより、龍哉は自身の『樂』の感情を無意識のうちに完全に殺していたのだ。

しかし、龍哉にそれを知る術はなく、ただ楽しいこと思えることがないのだと思った。

だから、自身の趣味や好みがハッキリせず、誰とも親しくはなれないのだと。

ならば、楽しいことを見つければ、親しい者が出来るのではない
か、と龍哉は考えた。

そして、龍哉は娯楽を求める続けるよつになつた。

まあ、今のところは楽しいことに出合えてはないようだが。

「何か面白いことないかなー」

しかしまあ、この一言が龍哉にとつての人生最大の転機であつたなどと、この世界の神ですら予想出来なかつたといふのに、誰が予想し得ただろうか。

何だか、前作とは書き方が変わった気が……（）
これで大丈夫でしょうか？

まだ、2話目は執筆してないんですけど（マテコラ
これでいいでしょうか？
それとも主人公視点にした方が？

作者的にはどちらでもOKなんですが、出来れば読者様の読みや
すい方がいいかと。
物事を判断できない作者で申し訳ないです……（）。

くつ、更新が遅い・・・！

8/16 改正

大きな建物。

どれだけ言葉を並べても、龍哉の田の前にある建物の大きさは伝わらないだろう。

建物の大きさだけでなく、見ていると圧倒されてしまう存在感という意味での大きさ。

ここには龍哉が通っている立派な私立悪戯学園。イタズラ

しかし、理事長の顔が生徒達だけでなく教師達にさえ知られていないのを“立派”と表現して良いのかは、いさや とか してつもなく疑問ではあるが。

生徒数が2万人を超える学園なのだが、細かく言つのであれば在籍している生徒という意味であり、実際に授業や講義に出席している生徒はその半分くらいである。

ちなみに悪戯学園の入試は色々とおかしい。

一般入試、推薦入試、とここまででは良いのだが、支援入試、面接入試、etc . . .

おそらく聞き覚えのない試験がいくつかあったと思うが、細かい説明しようとするとなくなってしまうのでこちらも機会があれば説明をさせていただく。

午前8時08分。

龍哉は第一校舎に到着していた。

この学園のメインとなる校舎は3つに分かれしており、第一校舎が1、2年生の教室で第二校舎が3年生の教室と特別教室、第三校舎が特別教室になっているのだ。

昇降口には、登校してきた生徒の数がちらほらとある。

この時間帯は電車やバスといった公共交通機関とタイミングがずれているので、現在登校しているのは主に徒歩か自転車などの登校

方法の生徒に限られる。

……中には高級外車で送られてきた謎な生徒も見受けられるが、龍哉は1年生なので、通称“鳥籠”と呼ばれる螺旋階段を使用し2階に上がる。

階段全体を包み込むように鉄格子があり硝子張りの上に、天井部分がドーム状になっているので、その形はまるで鳥籠のよに見えるためにそう呼ばれている。

「お、おはよー」

龍哉が教室に入ると、ボサボサの頭で寝起きにしか見えない男子生徒が挨拶をする。

その髪型の理由はと言つと、単に起きてから10分と経過しないからである。

彼 横川 遼は悪戯学園の学生寮に住んでいるのだが、その男子の学生寮の管理人が生徒を8時05分までには全員追い出してしまうのだ。

今日、遼は8時に起床したので、実質5分で準備をして登校した訳である。

「ん、おはよ。

そして、お疲れ」

「ふ、慣れたよ」

どこか遠い目をしながら、龍哉に返事をする。

遼は寝坊の常習犯なので、こんな状態で登校することも珍しいわけではなかつた。

龍哉にとつて唯一の知り合いに該当するのが横川 遼である。
知り合いと言つても、遊んだりするわけではなく、遼から龍哉に

遊技あそびを教えるのだ。

龍哉は1人で楽しいことを探すのにはどうしても限界があると考えたので、以前こういった遊技に詳しいといつ噂を聞いたことのある遼に聞いてみたのである。

最初は遼も聞いてくる龍哉に疑問を感じてはいたようだが、1ヶ月を過ぎた辺りから特に気にすることはない、今ではその関係を気に入っているようだ

窓側の列の後ろから2番目の遼の席の右隣が龍哉の席になる。龍哉は鞄を机の横に掛けると、隣の席に位置している遼に向き直る。

挨拶したときに遼は顔を上げていたのだが、今は眠いらしく机に突っ伏している。

「前に言つてた縛りゲーくらげ？」をやつてみたけど、そして面白さが分からなかつた

「そか。

ま、縛りゲーは玄人くもんじん向けの遊びだからね」

どうやら昨日は遅くまで起きてたらしく、遼は顔を上げることなく返事をする。

しかし、真面目に勉強をしているわけではなく、パソコンゲームをやつっていたのだ。

一応、言つておくが遼も龍哉も18歳以上である。

そこを踏まえた上で、ゲームのジャンルや内容に関しては「想像にお任せする。」

それもいつものことなので、龍哉が特に気にすることはない。

と言つても、やつているゲームの内容は全く知らない。

以前、夜遅くまでやる程に面白い遊技なら俺にも教えて欲しい、と龍哉が言つたのだが、遼は目線を逸らしあからさまに話題を変え

たとか。

「そろそろ、ネタが尽きてくるんだが……いつそ、人間觀察とかや
れば？」

他人の人生を見るのも、楽しいぞ？ たぶん」

「それじゃ、次はそれをやつてみる」

2人の話が終わると同時に、鐘の音が鳴り響く。

この学園の授業の開始や終わりの合図は、本物の鐘で行われてい
る。

鐘やその他諸々の施設は、完全に創設者の趣味である。
と、教室のドアが開き、龍哉たちの担任である五十嵐聖が前方

から入ってくる。

彼は30代と若い教師なのだが、男らしい性格で生徒達から厚い
信頼を寄せている。

実家は寺だそうだ。

「おーし、H.R始めるぞ」

竹刀の打ち合う音が道場内に反響する。

いくつもの竹刀がぶつかり合い、相手を仕留めんと勢いよく振り
抜かれる。

剣道というにはあまりにも荒々しく不格好だが、竹刀には扱い手
の魂が宿っていた。

入口から遠く 道場の奥には竜玄が今朝と同様に、瞳を閉じた

まま座っていた。

全く動かず、この道場内ではどう考へても田立ちそうにはないのだが、この道場入ってきた人ならば間違ひなく座つてゐる竜玄に気が付かれてしまう。

6

すると、道場の扉が開く。

道場の扉はスライド式の扉なので、レールと車輪が摩擦で道場内に音を響かせる。

その音は竹刀の「ふ」(かり合)の音に紛れて、決して大きいと言える音では無かつた。

を止め扉の方を向く。

入ってきた人物を見ると、彼らは竹刀を左手に収めて頭を下げ一斉に挨拶をする。

それを見れば人でてきた人物がこの道場で高い地位にいるかが窺えると思う。

「人間」

「ちまきにせず続けてください」

「「「「「はい！失礼します！」」」」」」

そう言つと、再び竹刀を構え正面の人と打ち合い始める。

先ほどよりも彼らの気合いが入っているように見えるのは、気のせいではないはずだ。

「今日は早かつたな」

奥に座っている竜玄が、入口に立っている人物に対して声を発する。

しかし、2人の距離は少なく見積もつても50m以上はある上に、打ち合っている竹刀の音は先ほどよりも大きくなっているので聞こえそうにないものである。

「珍しく仕事が何にも無かつたからね」

特に問題はなかつたようだ。

しかも、打ち合っている中を何事も無いかのように進んでいく。打ち合っている彼らも一応周りに気を配つてはいるのだが、真っ直ぐに堂々と竜玄の許に向かっている人にぶつからないように打ち合いを行うのは難しい。

それでもその人物には関係がないようで、竹刀を全て^{かわ}躰^くし竜玄の許へと到着する。

ここまで見ればこの人物が如何に非常識な存在かが分かると思つ。つまるところ、龍哉なのだが。

「そうか。

まあ、お前がおれば弟子達も^{あこひ}気合いが入るから、助かるわい」

「そりなんだ、それは初耳」

竜玄がいるので、説明するまでもないと思つがここには龍哉の家にある道場である。

一応、剣術道場として生徒を集め、その指導を行つている。

竜玄の趣味なので生徒と言つても受講料などは取らず、無料で鍛えて^かいるのだが。

更には生徒達は全て引き籠もり、登校拒否者、不良など元社会不適合者である。

ほとんどは近所の者なのだが、竜玄が街を散策し社会不適合者に出会う度に無理矢理 ではないにしろ、ほぼ脅しに近い形でこの道場に連れてくるのだ。

そこからこの道場で剣術の基本的な部分を指導をし、忍耐力や他の生徒とのコミュニケーション能力を鍛えて、社会復帰が出来るようにしているのだ。

完全にお節介ではあるが、生徒達の家族からはとても感謝されるらしい。

「お前は容赦がないからのお。 そうじゃ、久々にお前が指南するか？」

その時、生徒達の肩がビクリと反応したのは仕方のないことである。

もし龍哉が指導するとしたら、この道場内で無事な人間は2人だけになつてしまつ。

2人が龍哉と竜玄なのは、言わずもがな。

教え方が厳しいという訳ではないのだが、ただ指導に容赦がないのだ。

しかも、確実にその指導の成果が出るから質たちが悪い。

効果が出ている以上は、止めたくともまともな反論など出来る訳がない。

「んー、10分くらいなら。 読みたい本があるし」

10分 秒に換算すると600秒。

大抵の人にとっては、指導にしては短いと思つ時間ではないのだろうか。

指導を10分しかしないのに、本当に意味があるのか疑問に思つだろう。

しかし、こここの生徒達にとつては非常に長く緊張感のある10分の始りである。

その言葉を聞いた生徒達は竹刀を強く握り直し、全員が龍哉に向かって構える。

現在の生徒達の数は約50人。

現在、というのは仕事の都合や用事で来られない者もいるからである。

龍哉はその光景を見ると満足そうに頷き、竜玄から竹刀を受け取る。

「始めつ！！」

竜玄が声を上げると、龍哉の正面から1人の生徒が真っ直ぐに突っこんで来る。

その間に4人が左右に分かれ、絶妙な合間を狙い横から龍哉に迫る。

他の生徒達も、その動きに合わせどんどん展開していく。

ズドッ

鈍い打突の音と共に正面から迫つた1人の生徒が床に崩れ落ちる。銃弾のような速く鋭い突きを一撃。

生徒達は全員が防具を着けているので生命に関わるような大事には至らないと思われるが、当たつた時の音がどう考へても剣道で出るような音ではない

「1人」

冷たい声と誰かが生睡を飲み込む音が響き、温度が下がっていくのが感じとれた。

大きな満月が夜空とその下に住む者達を淡く照らし出す。詩人がこの場にいたならば、この月夜を何と詩を詠んだだろうか。芸術家がいたならば、どうやってこの月の美しさを表現しただろうか。

縁側に座り、龍哉は夜空に浮かぶ月をボンヤリと無感情に見上げていた。

月の美しさに感動しているのでも、何か別のことを探していっているのでもない。

本当にボンヤリとした様でそこにあるのだ。

その姿は今にも消えてしまいそうなほゞ艶氣で、まるで幻想のように思える。

隣に置いている緑茶は完全に冷め、龍哉がどれだけ長くここにいるのかが分かる。

しかし、夏だと書いたのに緑茶と云う選択はどうなのだろうか。

「龍哉、そろそろ一〇時になるだ

龍哉の背後にある襖が開き、その中から竜玄が顔を出す。

竜玄は着物を着ており、素人でも関係者でも極道の親分に見間違えるだろつ。

いや、ここら辺をある意味占めているので、間違いと言えないのではないだろうか。

「お休みなさい」

「いひむ、おやすみ」

龍哉は機械のような動作で立ち上がり、竜玄に挨拶をすると2階へと上がる。

その足取りはどこか覚束なく、意識がハツキリしてこる^{おぼつか}みたい見えない。

そのままの足取りで龍哉は自分の部屋に入り、即座にベッドに崩れ落ちた。

その様は、疲れてベッドにダイブしたわけでも何かに躊躇いたわけでもない。

倒れたと言つよりも力が抜けて、崩れ落ちたと表現するのが相応しい。

しかし、神林 龍哉のこの世界での人生は終わりを告げた。^{ストーリー}

途中にある「生睡を飲み込む」ですが、用法が違うやもです（汗）
ま、細かいことはスルーで！

書き方ですが、次話からが分かれ目になります。
さて、どうしたものか・・・・・（歎）

誤字・脱字など報告をお願いします。
感想・批評大歓迎です！！

第1話 正直、異世界とか言われてもいいんじゃないのだが…。（前書き）

俗に言つて、説明回です。

1話で説明回ですが、気にしたら負けです（ 、 、 、 ）

では、どう 5/31 修正

第1話 正直、異世界とか言われてもピンとしないのだが…。

どこからともなく降り注ぐ日光が、俺を照らす。意識は半ばないが、一応起きてはいる。ただ、周りの光や音を上手く認識出来ないだけだ。しかし、それも数秒でクリアになっていく。

俺は横になっている体を起こす。そこでまず目にしたのは、無骨な壁であった。近代の日本建築にしては、あまりにも前衛的過ぎるし、^{テコボコ}歐米に行つてもこのような仕上がりはないだろう。それほどに壁は^{凸凹}で、取り合えず建てました、といつ印象を受けたのも仕方ないと思う。

一度、目を擦つて見る。^{トト}しかし、目の前の光景に一切の変化は見られない。どうやら、知らぬ間に見知らぬ所に来ていたらしい……んなバカな。

「…………夢か」

だから、俺が目の前の現実を否定し、再び眠りに落ちようとしても、それは仕方のないことなのだ。俺は、非現実的な出来事に対応できるほどの能力を持ち合わせていない。

それに、いや、待てよ。もしかしたら、非現実的な中に娯楽があるかも知れないじゃないか！と、思えるような精神構造を俺はしていたなかつた。

確かに、楽しいことを見つけるだけなら、非現実的な物事の中にもあるかもしれない。しかし、それは同時に非現実的な事象に巻き込まれることを意味している。当然、それには命の危険も含まれることになる。

俺にとって、生は何に置いても優先させるべきものである。表現を変えよう。俺とつて、死は何よりも忌諱すべきことである。^{おそれ}仮に死んだとすれば、それは俺に繋がってきた命の否定になる。今

までに、子孫を残すという使命を果してきた先祖達に対する酷い侮辱である。そんなことを俺はしたくない。

……いや、本音を言おう。先祖の命の否定などは、どうでもいい。

単に、俺は家族を失いたくないのだ。

これを言つても、何を言つているのか理解されることは多々ある。口にすれば、まだ事故のせいで混乱していると思われ、病院に連れて行かれるのがオチだ。

確かに俺の家族は死んでいる。そんなことは分かつてている。言われるまでもなく、目の前で家族が死んだ俺が一番良く理解している。車が落ちる瞬間に見た妹の顔も、俺を逃がすために必死に窓を開けた母の顔も、家族を助けるために川に潜った父の顔も、忘れる訳がない。

俺が言いたいのは、誰が家族のことを覚えていてくれるのだろうか、と言つことだ。父も母も、それなりの年齢だったので、学校にも通い会社にも勤め、かなりの友好関係があつたはずだ。だから、その人生には意味があつたのだろう。

じゃあ、妹は？俺の妹はどうなる？

当時の俺より幼く、幼稚園に通つて間もない妹を誰が覚えている？同年代の子には、幼稚園にいたな、ぐらいにしか記憶されていないだろう。いや、もしかしたら、忘れられているかもしけない。学校にも通えず、会社にも勤められなかつた妹に友好関係などありはない。

祖父母も既に亡くなつており、親戚と呼べる間柄の人間も限られている。もし……もし俺が死んだら、妹は誰が覚えているだ？答えは、誰も覚えていない、だ。

誰も覚えていないのなら、妹は書類の上でしか存在を確認できなくなってしまう。他の同年代の子が笑顔で過ごしているのに、妹は書類にしか記されていないような存在となってしまう。そうなれば、

俺は本当の意味で家族を失うことになる。

そんなことを俺が許せるわけがない。ならば、俺が妹覚えていよう。その仕草も、声も、顔も、想いも、忘れてしまったとしても、俺には妹がいたんだと、胸を張つて答えよう。

その為に、俺は決して死ぬ^{なあきる}わけにはいかない。それが、俺の娯楽のためなどと言つた理由なら尚更だ。

と、思考が深いところまで潜つていると、不意にドアをノックする音がした。ここは俺の部屋でも無い上に、夢の可能性が高いのだから別段驚くようなことではないが、いくら思考に耽つっていたとは言え、気配に気付かないなど、武人にあるまじきことである。

俺はそのことに多少の警戒を覚え、ベッドから音もなく降りる。さつきまで完全に横になっていたが、警戒すべき対象が現れたのなら、迅速に行動するのは当然だ。

素足を床に下ろすと、足元に麻袋があるのに気がついた。袋の口から刀の柄らしきものが見えていた。見える限りで、凡そ十一振り。しかし、そのことに違和感を覚える。夢ならありえるが、現実問題として正体不明な者のところに殺傷性のある武器を置くだろうか。だとすると、俺に武器を持たせても大丈夫だと思っている者の犯行となる。

それならば、信用して置いているのか、刀では逃げ切れないと思っているのか。解答によつては、今後の行動が大きく違つてくるのだが。

この思考が終る頃には、俺は既に麻袋から刀を一振り取り出して、ドアの正面から少しだけ左にずれた位置に構え終つていた。刀を持った左手を腰に付け、右手を柄に置いた　抜刀術の構え。

この構えなら、先手を狙うことも出来るし、何より後手に回りやすい。状況が分からぬうちに、先手を取つて問題を起こしたら洒落にならない。それなら、後手に回るのは自然だろう。

ドアが開き始める。俺は全身の力を抜き、余計な筋肉を使わないようにする。緊張したりして、使わない筋肉に力が入ると動きの阻害にしかならない。

ドアが更に開く。右手で柄を握り直し、同時に足に力を溜める。ドアからの距離は2mもないのに、地面を蹴ればすぐに相手の懐に入れるだろう。

ドアが完全に開く。全身の感覚を研ぎ澄ませ、相手が強襲を仕掛けでこないか待つてみる。しかし、相手がこちらに攻撃を仕掛けることはなかつた。

そこで、相手の容姿を認識する。

まず、目に入るのは膝裏^{ひざうら}までのびた、長い水色の髪の毛だ。窓から入る日の光を反射していることから、丁寧に手入れをしていることが分かる。

次に、その白く細い腕である。訓練を受けている人間にしては、かなり細い腕だと思う。一般的な基準から見れば、普通かそれより少し細い程度だろう。

最後に、顔を見る。両目とも深い藍色をしており、その瞳からは上手く感情を読み取れない。敢えて言うのならば、爺さん^あ？ 林琉師範^{りゅうしほん}、神林^{じんりん}竜玄^{りゆうげん}が時折見せる、鋭さ^{するど}というものが感じられた。

その容姿からは普通に美人な女性^{ひど}だと思うが、この女性はそんなに甘い存在ではない。足の運び方や腕の動かし方、その一つ一つを見て判る。この女性は、高度な訓練を受けている人間であると。

それ程の訓練を受けていながら、なぜ腕が細いのかは気になるが、今は些細な^{ささい}ことだ。重要なのは、この女性が訓練を受けていて、間違いなく一流の戦闘者であるということだ。

俺が女性を観察していると、女性は俺を見て驚いたようで、息を呑むのが分かる。しかし、驚いたからと言つて隙があるとは限らない。女性は驚いた動作をしつつも、此方を同様に観察していた。

なので、俺は決して動かない。下手に動けば女性はすぐさま反応をするだろう。状況をよく分かつていらない現状で、余計な敵を作るのは拙い。それならば、女性の行動を待つてからでも遅くはない。すると、女性は息を吸い込み始めた。人間が大きく息を吸い込むのには、色々と理由がある。この場合に可能性が最も高いのは、間違いない悲鳴を上げるためだろう。

考えてもみて欲しい。部屋に入った途端にいるとは知つていたとは言え、男が刀を構えた状態でいるのだから。女性に對して、悲鳴を上げるなと言う方が酷であろう。

だが、同時に違和感も覚える。これ程の戦闘者がどうして、悲鳴を上げるような真似をするのか。普通ならそのまま反撃でもしそうなものであるが…。

「ダメですよ！あなたは意識がなくてずっと寝ていたのですから、きちんと横になつていないと！」

俺の予想斜め上を行き、何故か心配された。

聞くと、話の真偽は判らないが、女性は森に倒れていた俺を拾つてくれたそうだ。というか、森に倒れている俺つてどうゆうことだよ。爺さんの仕業にしては荒すぎる。誘拐の可能性がない、とは言い切れないが、神林にケンカを売るようなバカに心当たりは……2・3くらいしかない。

森に倒れていた俺と、その近くに落ちていた刀を拾つてこの家に連れてきたそうだ。大きなケガもなく、すぐに目覚めるだろつと思っていたそうだが、俺は3日間も眠り続けたらしい。

何度か、医者にも診せたのだが、原因不明なのでどうしようもなく、お手上げ状態。取り合えず、死んではいないので、看病をしようとい部屋に入つたら今に至るということらしい。

らしい、とか、だそうだ、が多いがあくまで女性に聞いた話なので100%本当とは限らない。都合の悪い部分は話していないかもしないのだ。

俺が女性を警戒するのには理由がある。無論、見知らぬ人の上に状況がよく分からぬといふものもあるが、一番の理由は女性の話の内容に時折出てくる“魔術”というものだ。

例えば、俺が倒れている近くに誰かいなか調査魔術を使つたが、誰も見つけられなかつた、とか、診断した医者の魔術の精度が悪い可能性が高いので首都に連れて行くつもりだつた、とか。

正直、何のことを言つているのかさっぱり分からぬ。いや、理解するのを拒否している。魔術なんて非現実的で最も危険度が高いものが何であるんだよ。。

しかし、恐らく女性は嘘をついていない。そのことは、瞳が雄弁に語つてゐる。だからこそ、本当は女性が上手い嘘をついているのだ、魔術という存在を否定したい一心で、女性を警戒をしているのは仕方ないことなのだ。

魔術がもし本当にあるのだとしたら、ここは俺がいた地球 宇宙とは全く法則の違うところとなることになる。人類が魔術というものを発見できなかつただけということもあり得るが。

しかし、魔術と言つても本当なのか分からぬ。もしかしたら、こゝは文明がめちゃくちゃ遅れているところで、機械を見て仕組みが分からず魔術だと言つてゐる可能性もあるのだ。

うん、そう考えてくると希望が持てて来たぞ。調査魔術とやらは、ただのサー モグラフィーを使ったもので、医者の魔術もただの医療器具かもしねえ。

…… そう思つてた時期が俺にもありました。目の前で氷を生成されれば、何も言えるわけがないだろつ…。くつ、調子に乗つて冷たいものが飲みたいだなんて、言わなければよかつた。

それと、女性に関する情報も得られた。

名前は、メリリア・リス・コートイスさん。年齢不明、見た目は年上。住所は首都。職業は王家直属の“フェルティナ魔導師団”所属。王家という時点で王国が確定し、魔導師団という時点で戦闘行為がありまくりだろ。いや、ただの魔術の研究集団という可能性もある。しかし、メリリアさんの動きを見る限り、ほぼ間違いなく戦闘集団だろう。

王国の直属で戦闘集団があるなら、戦争の終了直後か、戦争中、若しくは戦争開始前。一番嬉しいのは、護衛のためだけに存在していて、実際は戦争など起きないということだが。

過度な希望は現実を知つたときに辛いので、戦争前と思つておこつ。ちなみに戦争中というのはほぼありえない。なぜなら、ここにメリリアさんがいるからだ。戦争中にこんなトコにいるくらいなら、王様の近くにいるだろ。

戦争とか、最も死にやすいやつじゃないですか…。魔術＆戦争。そんな、常識を逸脱した戦闘には巻き込まれたくない。この対策は最優先で考えるとしよう。

この世界の情報が全く分からぬので、メリリアさんに聞こつと思つたが、もし常識的なことまで聞いたたら完全に怪しまれるので、3日間寝ていたことに関連づけ、記憶喪失ということにした。

最初にそれを言つたときは、一瞬だけ目を細め俺の顔を見たが、すぐに笑顔になつて色々と教えてくれた。正直、嘘だと気付かれてい

ると思う。あの表情は俺が嘘をついたときの姉の顔にそっくりだつた。

嘘と分かつていても、俺に教えるだけの利点がメリリアさんにはあるらしい。となると、俺は利用される可能性が高いのだろう。ならば、早めに逃げる手段でも考えておいた方がいいかも知れないな。しかし、逃げたとしても頼るあてがない。生きていけないということはないだろうが、もし戦争の開始前ならばある程度の安全を確保しておきたい。

それで得た情報だが、この世界は基本的に地球とは全く異なつていることが判明した。いや、今更な気もするが。

まず、存在している知的生命体が人間以外にも存在する。大きく分けると、人間、魔族、天族、獣人、森人、竜人（マジック）に分けられるそうだ。それぞれの種族の基本情報も教えて貰つた。人間は器用貧乏。魔族は戦闘魔術最高峰。天族は治癒魔術最高峰。獣人は身体能力最高峰。森人は狩猟技術最高峰。竜人は総合的性能最高峰。ということだ。しかし、あくまで基本的なことなので、個人によつては魔族なのに治癒魔術の方が上手いやつもいるらしい。

竜人は魔術は使えないが、種族中最強の戦闘者だそうだ。それだと何だか人間だけ弱く思えるが、国のトップや重鎮は人間が多いらしい。要領よく他の種族と付き合うには人間の存在が欠かせないとのこと。ちなみにメリリアさんは天族であるそうだ。

次に、魔術や精霊、魔獣、竜（ドラゴン）といった存在だ。ここまで来れば逆に諦めやすくなつてくる。

魔術はさつき聞いた。精霊とか言うなら、【サラマンダー】とか、【ワインディーネ】、【シルフ】、【ノーム】でも出てくるのだろうか。……普通に考えて、そんなのに出でこられても困るが。

竜といつたら、有名なのは【青龍】だろうか？中国の四神の一つで、方角は東のはずだ。だが、竜と言っても多種多様に存在するため、

どんなものが想像は全くつかない。変に固定概念を持つと、出遭つたときに反応出来ないかもしないので、元の竜のイメージは参考程度にしておこう。

ところで、魔獸って何ぞそれ。話を聞いていると、この世界の特定の生物を指すということは理解できた。ついでに、人に被害を与える存在であり、排除をしなければならない存在ということも知った。こちらの世界の独特の概念なのだろうか。

動物についても聞いてみたが、地球とは全くことなる進化を遂げているために、同じような生き物はあまりいないようだ。まあ、当然と言えば当然だ。

後は、地理のことも聞けた。家の構造やメリリアさんの話を聞く限り、科学技術はあまり発達していないようだったので、地理をきちんと把握できているのか不安に思つたが、そこは魔術が解決したようだ。

この惑星には大きな大陸が一つで、あとは島がいくつもあるようだ。昔、地球に存在した超大陸“パンゲア大陸”的ように思える。あと2億年もすれば、いくつの大陸に分裂するかもしれない。さらに細かい地理だが、メリリアさんの職業から分かるように、いくつかの国が形成されているらしい。さすがに、そこまで文明の発達が遅れている訳ではないようだ。

- 一つ、フェルティナ王国。
- 一つ、ヴァトラス帝国。
- 一つ、アルトバル聖国。
- 一つ、マレイストリア連合国。
- 一つ、コステイ商業連国。
- 一つ、ケシ居住区。

もう少し時間をかけて覚えたいので、詳しいことは後で聞こう。覚

えられないことはないが、整理しながら覚えないと、これとこの時に上手く思い出せない。

ついでに、一番重要である戦争についても聞いたところ、フェルティナ王国とヴァトラス帝国の間で緊張が高まっているらしい。詳しい経緯も聞いておかないとな。

さて、長々と記憶を整理したが、一番肝心なことは分からなかつた。言つまでもなく、 “どうして俺がこの世界に来たのか” である。いくつかの物語で見た、召喚という訳でもない。もしかしたら、ずっとこっちの世界なのかもしない。若干いやだな。命といつリスクを考えると、早めに元の世界に帰つたほうがいいように思つ。

うん、帰る方法を探すか。

あ、最後に驚いたことがあつた。メリリアさんから料理を振る舞われたのだ。手料理らしく、見た目は……うん、その、あれだつたが中々においしかつた。

この世界での初めての救いだつたかもしれない。

第1話 正直、異世界とか言われてもパンツにならぬのだが…。（後書き）

長い説明ウザーですねー。

しかし、これをしっかりと、後付け設定が増えて悲惨なことに…。
次から、話が進みますヽ(= 、 = 、 =)ノ

ちなみに、サブタイは作者の気分で決めています。
本当は話数だけにしようと思っていたんですけど、それでは寂しい
のでテキトーに決めていきます。
なので、突っ込んだら負けです。
でも、あまりにも酷い場合は整理して、真面目に考えようと思いま
す。

誤字・脱字など報告お願いします。

第2話 上京つて平和な響き。だけど、単に開戦準備。（前書き）

うん、今日は早かつたぞ！
いや、次回が遅れるかもしねりなが……。

第2話 上京つて平和な響き。だけど、単に開戦準備。

『首都へ向かひ』

この一言だけを聞いたたら、売れない歌手や芸人が自分を試すために、田舎から上京しようとしているようにも、仕事のない者が仕事を求めて上京しようとしているようにも聞こえる。

しかし、残念ながら今回は違う。それ以前に俺の中の常識が通用するような世界ではなかつたのだ。無論、首都の意味が違うとか、向かうの意味が違うとか、そんな話ではない。

そんな穏やかな話ではない。

メリリアさんがこれを言い出したのは、俺がメリリアさんの手料理を食べ終えて、そろそろ質問も落ち着いて来たときだつた。

「タツヤさんに、お伝えしておかなければいけないことがあります

「えつと、改まって何でしよう?」

さすがに、この時はかなり緊張をした。突然、メリリアさんが真剣な表情で話し始めたのである。さつきまで、笑顔で受け答えをしてくれていたのに、急に表情を変えられたら、何事かと心配になるに決まつている。

俺の呼称は“タツヤさん”となつていて、イントネーションがずれているところが、何といつか身体がむず_{がゆ}痒くなる。おそらく、慣れていらないだけだろうが。

「私は首都へと向かわなければいけません」

「首都に……ですか？」

首都といつのは言つまでもなく、国を中心と言える都市である。政治や経済といった重要なものの拠点となり、国で最も栄えている場所である¹⁴。

今回、メリリアさんが首都へ行くのは、言つまでもなく、戦争の準備のためだらう。緊張が高まつてゐるといつことは、火蓋^{ひぶた}が切られる日は近いといつことだ。当然、そうならない為の努力はしてくれていると信じて 信じさせてください。もし好戦的な国家なら、俺の命運は尽きたかもしれない。

メリリアさんは王家直属の魔導師団なので、かなり重要な地位ではないんだろうか。それなら俺のことは後回し 最悪、放り出すにして、首都に戻ればいいと思う。さすがにそこまで迷惑を掛けは、忍びない。

「ええ。ですから、タツヤさんはこの後、どうするのかと思いまして」

ふむ、これは慎重に決めなければいけない。選択によつては自ら死地に赴くことになる。

取りあえず、今後の目標を定めよう。

まずは、自身の安全の確保。これは最優先で行わなければならぬ。戦争や政治とかに巻き込まれたら、悲惨なことになるのは目に見えている。爺さんの戦時中の話とかは、聞くだけで凄まじいことが分かつたからな。

次に、この世界での生活の確保。この世界でも、貨幣のやりとりで経済を行つてゐるらしいので、早めに資金源を得なければならない。最終手段は狩猟生活……と言つても、この世界の動物や植物の

知識が乏しいので、難しいとは思つ。

最後に、元の世界に戻る方法を調べる。最悪、方法がないかもしれませんので、長期戦になることは覚悟しておべきだつ。まあ、なければ作ればいいのだが。

となると、今後の行動はある程度決まってくる。まずは

「うーん、記憶も無いですし、どうするかは決められないんですけど、何かいい案はありますか？」

「そうですね……。あ、それなら、私の家に来ませんか？」

ですよねー。

当たり前と言えば当たり前だが、メリリアさんが俺をそう簡単に手放すわけがない。この世界の知識を『えるだけ』えて、ではさようなら、とかどんだけ都合いいんだよ。そんな『まつまつ』い話はそうそうない。

更に言うなら、メリリアさんは軍人である。軍人が自国の利益になりそうな存在を見逃すだらうか。上手く運べば、助けた恩義とかで俺はフェルティナ王国の忠実な軍人となるのだから。恩義を無視すれば、俺は敵国の諜報員として処刑。そして、国家全体の士気を上げるつもりだらう。

俺を利用する気満々だらうが、こっちにも他に手段がないのは確か。ならば、こちらも少々利用させてもらつても罰は当たらないはず。

「え、いいんですか？」

「ええ、困つてこる時はお互い様ですので」

メリリアさんは笑顔で言つてくる。相変わらず、瞳だけは鋭いが……。軍人というより、政治家とかそっちの方が向いているのではな

いのだろうか。

さて、一先ず拠点を確保に成功した。ここを中心として動きまわることとしよう。

しかし、長居は出来ない。メリリアさんの立場を考えると、早めに離れなければフェルティナ王国の深いところに関わりそうだ。そうなれば、俺は絶対にフェルティナ王国から離れさせてもらえないくなる。国家の重要機密を知つてしまつた者の末路は、いつの世でも同じだらう。

「それじゃあ、お願ひします」

俺は笑顔で返した。

首都ローリアル。

フェルティナ王国の首都で、商業都市。1000万以上の民が生活を行つてゐる都市である。元の世界では東京都が約1300万人、ワシントンDCが約550万人。しかし、これは戦争がない世の中での話である。それを考えれば、すごい人口だと言えよう。メリリアさん家で地図を使って確認したが、この世界の大陸は元の世界よりもかなり大きい。具体的な大きさを説明しようにも、元の世界の単位が合わないので何とも言えないが、さつきの村 メリオ村から地図上で1mmに満たないの移動が馬でぶつ続けても一日と少し掛るそうだ。

馬がおよそ60km/時ということを考えれば、1mmに満たない距離が日本の長さとほぼ同等の距離 3000kmになる。しかし、馬と言つても元の世界と同じではなく、さらに丈夫そうで全長

が2mを超えているであろうやつなんだが、もしかしたら距離はもつとあるかもしない。

メリオ村から首都までの距離は、馬で4時間とちょっと。これが遠いのか近いのは判断できないが、馬に乗ったのは初めての経験だった。尻が痛くなると思っていたんだが、そこまで無かつた。

「それにしても、わすがと並べべきか何といつか……」

権力や社会的な地位などは、俺には父のことを除けばほとんど関係のない話だつたし、権力などに関わる気もなかつたので、どうこうものか良く理解していなかつたのだが、初めてその凄さを目にした。

首都に入るために検問を行つていたのだが、如何せん俺には身分を証明できるものなどあつはしない。ついでに言つのなら、刀以外は何も持ち合わせていない。つまり、確実に首都には入れないということだ。

さて、どうしたものかと考えていると、どうやら時間切れのようで俺とメリリアさんの番がやつてきた。

メリリアさんをチラリと見てみたが、特に慌てたような様子も見せず、静かに佇んでいた。何か考えがあるのだろう、と期待し俺もメリリアさん同様に静かにいることにした。

兵士がこちらに近づいてくると、身分証明を出来るものを要求してきた。察するに、この街に出入りするためには、登録的な何かをする必要があるのであつ。諜報員に対する警戒と見て間違いないだろう。

それに対し、メリリアさんは懐からカードのような物を取り出した。

と、それを受け取った兵士の顔が固まつた。正確に言つのなら、全身が固まつた。

その状態で10秒くらい経過して、やつと動き始めた。最初はメリ

リアさんとカードを何度も見比べて、次に慌てた様子で『しょ、少々お待ちください』と声を奥へと消えて行った。

しばらくもしないうちに、他の兵士より歳が離れている熟練っぽそな男性がやってきた。っぽそ、というのはあまり実力の高さを感じられなかつたからである。本当に熟練者なら実力を隠している可能性もあるため、俺には判断ができなかつた。

その男性は緊張した様子でメリリアさんと会話をすると、俺の方を一瞥し、そのまま街へと入れてもらえた。

つまり、身分証明証にメリリアさんが魔導師団であることが記されていたために、兵士たちは緊張していたのだろう。凄いな、魔導師団。

「そんなことあつませんよ。さすがにあれば反応が大袈裟過ぎます」

メリリアさんは笑つて言つたが、あの兵士の法え方は尋常じやなかつた。まるで、目の前に悪魔が

「何か？」

……久々に背筋が凍るのを感じた。爺さんの殺氣のよつた粘り付くようなものではない。どちらかと言えば姉さんのソレに近い。只管に鋭く、冷たく、恐ろしい殺氣。世界が凍りついたように感じられる。冷や汗が止まらない。メリリアさんから目を離せない。思わず、刀を抜きたくなる衝動に駆られる。

それを堪えるために、俺は出来る限りの笑顔で返す。

「いえ、何でも」

「やつですか」

さて、俺たちはギルドに向かっている。……話が逸れたとか、そんなことは知らない。知らないたら知らない。

なぜ、ギルドに向かっているかの前に、ギルドについて説明をしておこうと思つ。

ギルドとは国境に關係なく展開している万屋である。ギルドに依頼を届ければ、ギルドに所属している者　冒險者たちがその依頼をこなす。依頼が成功すれば、依頼者は冒險者に金錢を払う。ギルドは仲介料をその中から貰う。

ただそれだけのシステムである。単純だが、単純だからこそ分かりやすく幅広く使われているようだ。

ただし、ギルドは政治的な依頼については受けない。国境なく展開しているために、それぞれの国に肩入れすることは出来ないらしい。あくまで、市民のためにやつているとのこと。

そして、俺がギルドに向かっている理由だが、単純に冒險者として登録して金を稼ぐためである。

冒險者には実力さえあれば誰でもなれるようで、特に身分証明などは必要がないらしい。むしろ、ギルドの登録カードが身分証明になるそうだ。

何だか緩い、と思われるが、別段そういう訳ではない。まず、ギルドのある街に入る時点で身分証明が必要なのだ。そして、身分証明なしで入ったものは、俺みたいな　権力者のお気に入りとなる。ギルドとしても、国家に肩入れは出来ないがあまり悪い関係にはなりたくないようで、権力者のお気に入りなどはギルドの登録を積極的に行つている。無論、問題が無いわけではないが…。

なので、俺もギルド登録をして、資金源を確保しようと思つたのだ。

しかし、実力があるつてどのくらいの強さを指すのだろうか？

第2話 上京つて平和な書き。だけど、単に開戦準備。（後書き）

うむ、段々と頭の中が整理できなくなつてきました（ まだ2話目 ）さて、主人公つてどういうキャラだったかな？

誤字・脱字など報告お願いします。

第3話 ギルドって中世の同業者組合ひじご。（前書き）

ギルドの説明回…。

文字数を増やすべきだらつか？

おそらく更新の速度は変わらずに、作者の精神的な何かが減るかと。

6 / 7 修正

第3話 ギルドって中世の同業者組合らしい。

ローリアルに入つてしばらく歩いていたが、この街はかなり賑わっていると思う。この世界での比較対象がメリオ村だけなので、当然と言えば当然かもしれない。だが、パツと見たところ、少なくとも俺の地元よりは人口密度が高い。さすが首都、と言つべきか。それとも、俺の地元が田舎すぎるだけなのか……。

街はかなり綺麗に整備されており、地面がアスファルトのようなもので舗装されているのには驚いた。メリリアさんに聞いたところ、これも魔術の恩恵らしい。

緩やかな坂道の両側では、商人たちが道行く主婦たちに夕食の食材を薦めている。やはり生態系は独自の進化を遂げているようで、野菜らしきものを見ていると興味を覚える。棘が生えているキャベツのようなものはおいしいのだろうか。

道のずっと先には大きな建物 というか、城 が見え、ここが日本ではないことを嫌というほど分からせてくれる。いや、魔術を見た時点で殆んど諦めてたけどさ。

そう言えば、途中で緋色のロープを買ってもらつた。

理由としては、周りの人の注目をかなり集めていたからだ。メリリアさんもそうだが、この世界の人は髪の色がかなり派手である。それに対して、俺は黒。違和感がありまくりなのである。

そのため、メリリアさんにどうにかならないかと聞いたところ、ロープを買つてくれると言われた。最初は遠慮をしたのだが、聞いてもらえずに購入してもらうこととなつた。今度、何かお礼をしなければいけないな。

ロープを着ると全身が隠れるので、見た目は完全に不審者である。そうすると、結果的に注目を集めることになつた。本末転倒とはこのことか……。

通りをさうに進んでいくと、城とはまた別の大きな建物が建つていた。と言つても、城に比べればかなり小さいと言える。……当たり前か。

言つまでもなく、ここがギルドなのだが、建物の内部からはとても賑やかな声が聞こえる。むしろ、騒がしい、という表現が正しいかもしだれない。どんだけ騒いでいるんだよ、近所迷惑を考えるべきだろ。

メリリアさんは騒がしいのに対して、何の反応もすることはない。どうやら、この騒がしいのはここでは大したことではないらしい。とこうよりも、これが当然のよつた表情をしている。それはそれで不安だ。

そして、速度を落とすことなく建物の中へと入つていく。俺も遅れないように、メリリアさんの左斜め後方をついていった。

建物の中は凄まじかった。
すさまじかった。

300人くらいが置いてある机を囲むよつとして、飲食を楽しんでいる。いや寧ろ、騒ぐのを楽しんでいて飲食はついでのよつにも見える。それ程に騒がしい。

体格のいい男たちが木彫りのジョッキを高く掲げ乾杯などを行つてゐる。周りでは給仕たちが多くの注文を捌くのに、忙しなく歩き回つてゐる。ここがギルドであることを考えると、おそらく依頼の成功を祝つたり互いの苦労を勞つてゐるのだろう。

にしても、女性の数が圧倒的に少ない。パツと見たところ、給仕を除けば数えるほどにしかいない。依頼には危険なものもあるようなので、やはり男性が主でやつてているのだろうか。それとも単にこんなむを苦しい場所を嫌つたのか。……後者だな。

メリリアさんはそんな人たちに目をくれることもなく、カウンターへと足りしきところへと近づいていく。俺もそれに倣いカウンターへと足

を進める。

幸い6つあるカウンターには、どこにも冒険者がいなかつたので、特に待つことも無く受付嬢へと話しかれるよつだ。と言つても、話しかけるのは俺ではない。

「メリリアです。新たな冒険者の登録をお願いします」

メリリアさんが名前を告げると、建物内が静寂に包まれた。先ほどまで騒いでいたはずの冒険者たちは、一様に動きを停止させている。また給仕や受付嬢も同様に停止していた。安定している姿勢なので大丈夫だとは思うが、一体どうしたと言つのだらうか。恐らく、というか確実にメリリアさんも空氣の変化に気付いているとは思うが、反応がない。ハツキリとは断定できないが、周りの反応はどうでもいこうだ。

「お願いできますか？」

有無を言わせぬ威圧感を放ちながら、受付嬢に問う。正直、そんなことをしても受付嬢は畏縮するだけだと思つ。が、ギルドの受付嬢はかなり場慣れしているようで、メリリアさんの問に声こそ発せられなかつたが、頭だけ頷くと奥へと入つて行つた。その間にも建物内には、誰かが緊張のあまり唾を飲み込む音しかしない。

その状態でどれくらいの時間が経過しただらうか。実際にはほんの2、3分だつたかもしれないが、この空氣の中では1時間よりも長く感じられた。

「失礼します。新加入の冒険者の担当は私となります。それでは、こちらが手続きです。必要事項を記入したのち、後日提出をお願いします」

先ほどの受付嬢とは違い、メリリアさんを前にしても怖氣づくことなく、堂々としている。もしかしたら、このギルドではかなりの熟練者の方ではないのだろうか。雰囲気が安定しており、手元にも迷いがない。

女性がメリリアさんに差し出したのは一枚の紙だった。後ろから見てみると、何と書いてあるのか全く読めない。ここまで言語形態が違うと、覚えるのが大変だな。

…………ん？ “言語形態が違う” んだよな…………。

だったら、どうして俺とメリリアさんは会話を成立させることが出来るんだよ。と云うか、どう聞いてもメリリアさんの言葉は日本語だ。もしかして、この国の言語は日本語なのか？

そうだとしたら、元の世界に戻る希望が持てる。日本語があるのなら、それを伝えた誰かがいるはずだ。俺と同様にこの世界にやつてきた日本人の誰かが。

「次に、こちらがギルド規則をまとめた規則書となります。こちらは、常にギルドに置いているのでいつでも確認してください」

だが、こちらに来ただけで帰れなかつたかもしれないのだ。あまり希望を持つのは駄目だな。

だとしても、俺が初めてのケースでないだけ、まだマシである。何度も起ころうのような現象には必ず見つけやすい原因がある。それを特定できれば元の世界に戻るヒントになるはず。

まずは、こっちの世界にやつてきた者についての情報を集めるべきだろう。それから、その人物の経緯を辿る。そして、俺と同じような経緯があれば完璧だ。

そこから、互いの共通点を探つていけば、必ず原因へと至るはず。如何なる現象にも原因があつて、初めて結果がある。俺が異世界に移動したなどという“結果”があるなら、異世界に移動した“原因

”があるのも当然だ。

原因さえ分かれば後はどつこでも出来る。

「では、簡単なギルドの説明をさせていただきます。無論、今から言つことは先ほど規則書に載つてるので、いつでも」確認いただけます」

つと、意識が逸れている間に話が進んでいく。

チラリと隣を見ると、メリリアさんは特にどつこもすることなく、立つてそのままである。受付嬢は俺の方を見つけるようだ、実際のところはメリリアさんをかなり気にしている。露骨過ぎでしょ。うーむ、そこまで気にされるメリリアさんって一体……。

「まず、ギルドの説明を行います。ギルドとは寄せられる依頼クエストを冒険者に提供する場です。あくまで提供をするだけなので、クエストの内容が犯罪に関わらない限り、ギルドはそのクエストに対し不干渉となります。また、仲介料として依頼料から少しだけお金を引かせていただきます」

何という都合良さ。仲介はするが、その依頼に関しては責任を持たない。でも、仲介料はきちんと払えとかギルドに都合が良すぎるだろ。

しかし、それでも成り立つてては、思うほどにギルドの管理は酷くないというだつ。これで、仲介料が高かつたりあまりにも依頼内容が酷いなら、すぐに潰れているはずだ。

「次に、冒険者に関する説明を行います。ギルドに登録された方は冒険者と呼称されます。冒険者には階級が存在していて、冒険者の実力がそのまま階級に反映されます。また、階級はクエストにも設けられており、基本的に自分の階級以下のクエストしか受注を行え

ません」

分かり易い実力至上主義だな。ついでに、位を設けることで、ギルドとても実力者を区別し易い。実力のある者には、相応の待遇をし実力の無い者にも相応の待遇をする。

そうすれば、実力ある者はギルドに残り、依頼の達成率が上がる。達成率が上がればギルドの依頼も増える。依頼が増えれば、ギルドの儲けも増える。ギルドの儲けが増えれば、さらに良い待遇を実力者に行う。さらに良い待遇なら、実力者も依頼をさらにに行いつようになる。完璧な循環が出来あがつてるな。

さらには、実力の無い者に差を見せつけることで、全体的な実力の向上を図る。冒険者をやるからには、腕に覚えのある者ばかりだろう。それなのに、実力が無いから待遇が悪いなど、侮辱もいいところである。侮辱をされて、ただで引き下がるような者はいまい。

「階級は下から、F・E・D・C・B・B₊・A・A₊・AA・A₊・A₊・A₊です。階級はSSを除き、クエストの成功数、失敗数と試験に応じて昇格、降格をさせていただきます」

……階級がアルファベットなのには、今更突つ込むまい。

試験とは何だろう。筆記なら俺はこここの文字を覚えるまでは昇格出来ないと見て間違いない。しかし、未だに静止している冒険者を見る限りは、教養が高そうなやつはあまり見受けられないでの、大丈夫だとは思う。

たぶん、実力主義らしく魔獣の討伐などだらうとは思うが。

「昇格試験に必要なクエスト数は階級ごとに異なるので、規則書を確認しておいてください。また、降格の条件はどの階級でも自分の同階級のクエストを3回連続での失敗となりますので、ご注意ください」

なるほど、失敗には厳しい処罰を下し絶対的な依頼の成功を促される。こうすれば、冒険者たちも下手に難しい依頼を受けようとするので、依頼の成功率が高い水準を保てる。

逆に昇格には厳しい条件を設け、実力の低い者が上の階級に行くのを避けているのか。それにより、実力者のみが難しい依頼を受けるようになる。

ギルドも評判を保つのが大変らしい。

「CからBへと昇格する際には更に細かな登録が必要となります。それと、SSに関しては昇格する条件が異なります。まず、SSになるには現SS階級の者を2人以上を納得させる必要があります。2人以上が納得した場合にその人はSS階級となります。また、Sには降格がありません。以上の点にはご留意ください」

C以下の実力者はどうでもいいが、B以上となるとギルドも下手に手放すような真似はしないようだ。となると、Bというのがギルド内での一定の境界線となるのだろう。B以上になるなら、注意が必要だな。

ついでに、SSとが絶対になれないだろ。SSの階級の人が納得するわけがない。自分と同等の実力者を認め、増やすことになる。そうすれば、全体的にSSという価値が失われていくこととなる。それは出来るだけ避けたいと思うのが、人の性ではないのだろうか。

「続いて、クエストを受ける際の説明を行います。クエストには種類がいくつか存在しますが、細かな分類はあまりないのでクエストの内容を読み判断してください」

適当だな。分類別けぐらいしてもいいんじゃないだろうか。こう、もう少し冒険者に対する配慮をしてほしい。かなり御座なりだ。

「また、クエストは複数人で受注を行うことが出来ます。参加人数に明確な規定はありませんが、参加する方はクエストの階級の一つ下かそれ以上の必要があります。複数人で受けても単独で受ける場合と依頼料は変わらず仲介料も変わりません。さらに、昇格のためのクエスト数には数えられませんので注意をしてください」

1人では限界があるし、これは当然だと言える。さすがに全ての依頼を1人でやるのには限界がある。

それに、これも冒険者の実力向上に繋がる。自分よりも実力が高い者と一緒に依頼に行くことで、良い経験を積むことができる。聞くよりも実際に目にする方が良いのは、言うまでもない。

「最後にギルドカードについて説明をします。ギルドカードとは、その者のギルドに関する情報を記入されたカードです。ギルドカードはギルドがある場所での身分証明証としてもご利用いただけます。尚、階級が高いほどギルドはその身分を証明するので、階級によっては適用されない場合がございますので、ご注意ください」

便利だなギルドカード。というか、ギルドカードだけで身分証明が行えるってすごいな。しかし、そこまで力を持つているギルドに国は何も言わないのだろうか。いや、もう言えないのか。

メリリアさんの話を聞く限りでは冒険者たちはかなりの数が存在し、大勢の人にその存在を歓迎されている。もし冒険者の収入源であるギルドを潰したら、冒険者たちと歓迎している人たちの抗議は目に見えている。そんなことをされれば国としては堪たまつたものではない。だからこそ、ギルドの政治的な不干渉。あくまで国ではなく個人のために。それが無ければこの大陸の情勢はもっと酷いことになつていたかもしね。

「説明は以上となります。疑問点がございましたらギルド職員に質問を行うか、規則書でお調べください。それでは規則書をよくお読みになつた上で、ギルドの登録をするよつてお願い致します」

第3話 ギルドって中世の同業者組合ひじご。（後書き）

作「質問」一なー」

龍「いらんものを」

作「いや、登場人物との掛け合いつてしてみたいじゃん。それに主人公の性格がよくわからないから、ここに場を設けて少しでも読者様にご理解をしてほしいし」

龍「俺の性格が安定しないのは、単に作者がギャ ゲのやり過ぎで、目立つところのない主人公が普通になっているからだろ」

作「…………。さて、感想に『龍哉の姉って誰？登場させるならプロローグからやるべきでは？』という質問がありましたので返事をば」

龍「逃げたな」

作「姉の件は本来、登場させるつもりはあまり無かったのですが、作者の安易な考えで登場させてしまいました」

龍「もう少し計画的な行動をしような」

作「うい。プロローグに無理やりぶつこむのは、キツイです。姉は今後出番がありますので、その時までお待ちを」

龍「というか、これで俺の性格がわかるのか？」

作「ロープの件は忘れていたので、ぶつこみました（＊）＊（＊）」

龍「言葉のキヤツチボールをしろよ」

誤字・脱字の報告をお願いします。

第4話 女性の両親に挨拶…って別にやさしい関係ではない。（前書き）

べ、別に雀龍 にハマって更新が遅れたわけじゃないんだからねっ！

7/13 修正

第4話 女性の両親に挨拶…つて別にそういう関係ではない。

どうしてこうなったのだろうか……。

目の前には、机に並べられた豪華な料理の数々。料理は現在進行形で増加中だ。どう考へてもこれ以上は机に乗り切れない。視線を少し上げると、ニコニコと笑っている男性。歳は五十代前半と推測される。優しそうな雰囲気を放つてあり、とても人が良さそうだ。無論、それだけでその人物を判断するのは、早計というものだろう。

視線を俺の隣に向けると、そこには顔を赤くして小さくなっている女性。もちろん、メリリアさんである。元々の肌が白いので、肌の赤みが余計に際立っている。

さて、この状況が何なのかと言えば、話は少し前に遡る。さかのね

「ヨリが私の家です」

ギルドの建物から、城の方へと近づいたところでメリリアさんが立ち止まる。ちなみにメリリアさんが言つには、城はこの街の中心にあるらしい。それだと襲撃時の国王の避難とかどうするのだろうか。それとなく聞こうかとも思つたが、変に怪しまれても困るので諦めた。

城から離れたところは^{いぜん}依然として活氣があるのにも関わらず、ここはかなり静かなところだった。周りの家々は明かりが点いてはいるが、騒がしい気配などは感じられない。寧ろ、上品な雰囲気を感じられる。

メリリアさんが立ち止まつた正面にある家も、周りの家同様にかなり豪華な家だつた。かと言つて、煌びやかというわけではなく、どちらかと言えば莊嚴やうごんという表現が正しい。

見た限り、家の明かりは点いているのだが、物音も一切しないので家が死んでいるような感じがする。……普段は静かなだけじゃ何とも思わないのだが、そんな風に感じるなんて俺は少し緊張をしているのかもしね。

そこまで緊張する理由はないはずなのだが、何だか無性に嫌な勘がする。

「タツヤさん？どうかしましたか？」

考へてゐるうちに、メリリアさんは扉を開けて中に入ろうとしていた。俺がいるは通りの真ん中であり、今は人通りが少ないがこのままでいれば邪魔になるのは確実だらう。そのため、メリリアさんが早く家の中に入ろうとする行動は何らおかしくはないのだが、俺の覚悟が決まってない。

しかし、これ以上考へたところで、現実が変わるわけではないので諦めて家の中に入ることにする。正直、かなり気が進まないが、嫌な勘がするというだけで他人の家に入らないのはさすがに失礼だろう。

中にはいると外観から予想できた豪華さと大した差異はなく、想像通りの様が広がつていた。

頭上にはシャンデリアというには少しだけ小さいが、十分に豪華な照明器具があり、無駄に目立つこともなく照明として辺りを照らしている。その光に映し出されているのは、高価であろう美術品の数々。

美術品に関しては、元の世界で少しだけ嗜たしなんだことがあるが、見た限りでも十分に価値があることは分かつた。無論、この世界と元の世界の価値観が同じである確証はどこにも無いが。

「いらっしゃるです」

俺があちらこちらに視線を送っていると、メリリアさんは少しだけ微笑みを向けて、奥の扉へと進んでいった。どうやら俺の行動はメリリアさんに見られていたようだ。これは……恥ずかしい。しかし、庶民の上に癪のようなものなのだから仕方ない。物珍しさに興味を覚えるのは、新しい娯楽を見つける上で重要なことなのだ。

扉をくぐると、広い応接間に出了。応接間には先ほどまで通つてきたところよろは、物が少なく感じられた。俺はどちらかと言えば、応接間のような広い場所に高価で大きな物を置いてそうな印象がかったのだが、単なる俺の思いこみだらうか。

「こちらに座つてお待ちください」

メリリアさんが部屋の中央付近にある大きなソファーを示す。皮で出来ているようで、光沢や傷を見るとあまり使い込まれているような形跡は見られない。にしても、豪華だ。

というか、俺はさつきから豪華としか感想がない気がする。しかし、こんなに見事な家を見れば誰でもそういう感想しかねないだろう。しかし、それ以外に何て言えばいいのか分からぬ。こんな時に語彙が少ないとモヤモヤするな。上手く言葉を表現できなくてそう感じるのは、やはり言語を持ち他人と感情や情報の共有をしたがる人間独特の感覚だらう。

メリリアさんは俺が座るのを確認すると、部屋から出て行つた。

「場違い過ぎる」

一人の部屋でポツリと呟いた。豪華な部屋に緋色のローブを被つた男が、一人だけ座つてゐる。華がない上に男が若干そわそわしてい

るので、例え名のある画家でも題材にされたら困るような光景である。

メリリアさんが出て行つてから、数分もしないうちに部屋に近づいてくる気配がした。数は3人分であり、その内1人は先ほどまで一緒にいたのでメリリアさんのものだと分かるが、残りの2人は知らないものだ。

……何だか気配に違和感を覚える。かと言つて、何かおかしな点があるわけではない。おそらく、緊張しているためにそう感じられたのだろう。

納得しながらも俺は無意識のうちに刀を近くに寄せる。何事にも出来る限りは、保険を掛ける主義なのだ。臨むなら万全の状態で、どのような事態にも対処できるようにしておく。これが俺の行動する際の癖みたいなものだ。

扉が開くと、メリリアさんと1組の男女がいた。男女は一人ともメリリアさんよりも年上のようで、人のよさそうな笑顔を浮かべていた。

「紹介します。こちらが私の両親です」

「どうも、メリリアの母のクラシスです」

「父のマルチです」

メリリアさんが言つと、男女は名前を告げ頭を下げる。うーん、どうも挨拶を見ていると日本の風習がかなり混じつている気がする。やはり、前の来たやつの影響なのだろうか。

俺は一人が頭を下げたのを見て、ソファーから立ちあがりフードを同じように挨拶をする。と言つても、相手の行動を観察しつつではあるが。

「俺はタツヤ カンバヤシと言います。メリリアさんにはお世話になつてます」

なぜか、同じ職場の人のような挨拶をしてしまつた。しかし、これ以外に何を言えばいいのかも分からない。間違つていいわけでも嘘でもないので、問題はないだろう。

それはいいんだが、クラシスさんとメルチさんはなぜか生暖かい視線を俺に向けている。そんな目線を向けられる覚えなど皆無だ。憐れむわけでもなく、どちらかと言えば愛おしそうに見られている。俺は何かしたのか？

「いえいえ、メリリアのことをこれからもよろしくお願ひします」

「少しばかりドジなところもありますけど、優しい子ですので」

これは職場の人と勘違いされたのだろうか。その場合、その間違いは訂正すべきなのだろうか。悩みどころである。

ここでその間違いを否定すれば、メリリアさんとの関係を改めて説明をしなければならないが、今日 いや、3日前か 知り合つたばかりの人物を自宅に招くなんて驚かれるだろう。

だつたら、最初から同僚としていれば説明に困らないし、何よりメリリアさんと同僚ということは、富仕えになるのだ。それなら身分も証明されるから、2人にも無闇矢鱈に俺について質問などをすることもないだろう。

考えると利点が大きいようだ。なら、このまま

「それで拳式はいつ『じろに?急かすわけではないんですけど、出来るだけ早いほうが良いと思うんですよ。やっぱり、私たちも早く孫は見たいですし」

はい？

え、何、え、どなことへど、どひやつてその結論に？あれえ？そんな会話してたか？というか、そんな要素がどこにあった？まずは、落ち着こう。情報の整理だ。『何時如何なる時、如何なる場所でも冷静たれ』が？林流の根本である。例え、突然、戦場に放り出されようとも冷静にならなければならない。

とこうか、メリリアさんは顔を朱にしないでください。これで本気とかに受け取られたらお互いに拙いでしょ。

「お父さん、お母さんも！」

メリリアさんは顔を朱に染めたまま2人に言つが、2人とも聞く耳持たずの状態だ。俺とメリリアさんを置いてきぼりにして、完全に2人だけの世界に入つていい。妙に楽しそうなのは、決して見間違いなどではない。

つて、そうじゃない！

「あの、俺とメリリアさんはそんな関係じゃないので」

俺とメリリアさんが付き合つてこりなどといつ噂でも流れたら、大変なことになる。片や異世界出身者で、片や国王直属という身分だ。ましてや、戦争になりそうな時期にそういう身分の人が、恋に現^{うつ}を抜かしていいなどびこうことになれば、反感は必至だろう。例え、冗談などでもそういう話題が、そのまま噂にならないとは限らない。だつたら、最初から絶対にないと否定をしておかなければならぬ。

「……やつですよね」

メリリアさんはしゅんとなる。

え、何だろ？」の空気。クラシスさんとメチルさんがジト目をじりじりに向けてくる。

何となく意味は分かる。取りあえず、何故か落ち込んだメリリアさんをどうにかしろ、ということだらう。しかし、原因が分からない以上は解決のしようがない。

だったら、考察するしかない。直前の会話から察するに、俺がメリリアさんを拒絶したような意味合いに取られてしまつたのだらう。ならば、どうすればいいのだろうか。

ここは無難にフォローをしておけば、たぶん大丈夫なはず。

「やつぱり、メリリアさんにはもつといい人が「そんなことありますん！」

……これはあれだな。逃げ道がない。いつもならどんな状況でも保険を使って逃げれるのだが、今回みたいな突発的な事態には対応できない。まだこの世界に来たばかりでは、尙更のことである。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。取りあえず、『ご飯でも食べたら？』

クラシスさんは俺とメリリアさんに唐突な提案をする。と、いうか、話題転換。さすがに強引過ぎるような気がしないでもないが、今はこれに乗る以外に俺に逃げ道はない。

なので、クラシスさんの提案に従つて「一テイス家で夕食をいただくことになった。

話を逸らしてくれたクラシスさんに感謝しようと思つていたが、よくよく考えてみると、クラシスさんとメチルさんがあんなことを言わなければ、こんな事態にはならなかつたはずなので、心の底から感謝出来なかつた。

そうして話は赤面しているメリリアさんのシーンへと戻る。メリリアさんはずっと朱に染めたままで戻らない。どれだけ引きずつていのやう。

目の前にある豪華な料理の数々は完全にクラシスさんの勘違いである。というか、分かつてふざけてやつてている感がある。……そう信じたい。

料理 자체はとてもうれしい。この世界に来てからは色々と頭を使つたので、いつも以上に空腹に見舞われている。俺だつて常時深く物事を考へてゐるわけではないのだ。今回は緊急時なので、1から10のことを得ようと脳を活動させていたのだ。

「さて、これで最後！」

クラシスさんは最後に大きな鍋なべを机の真ん中に準備した。机の敷き詰められた料理は、机にこれ以上はものを置けないような状態になるくらいに数があつた。敷き詰められたという表現を机にある料理に使うとは初めての経験だ。

かなりの量を作つてゐるのだが、見た限りではクラシスさん一人で作つた。豪華な家なので使用人でもいるのかと思っていたのだが、先ほどからそのような人物は見かけない。この家にはこの3人だけで住んでいるようだ。

「こんなに作つて大丈夫ですか？」

「あははははは」

クラシスさんは笑うだけで答えなかつた。せめて、嘘でもいいから肯定の意を示してほしかつた。残念ながら、俺は出された料理を残せる性格ではないのだ。何とも悲しい性だらうか。

食事が始まるとクラシスさんとメチルさんにメリリアさんと俺の詳しい関係を聞かれたので、同僚といつことにしつつ勘違いを正そうと俺は奮起^{ふんき}していた。

なぜか、メリリアさんは最後まで一緒に説明^{あいまい}してくれなかつた。クラシスさんとメルチさんに聞かれても、曖昧な答えしか言つていなかつたのだ。そのせいなのか、二人ともなかなか俺の話を信じてくれず、最後まで勘違いをされたままだつた。

……まあ、途中から諦めていたが。

食事が終わると、メリリアさんは俺を部屋まで案内してくれた。部屋の位置は建物の一階の階段に近い部屋だつた。

俺がこの家に宿泊^{メリリアさん}することを説明していなかつたようだが、話すとクラシスさんとメルチさんが即刻、OKを出した。

おい、いいのか女性^{メリリアさん}がいるの?。いや、邪な考え方があるわけではないが、世間体とかそう言ったことをもつ少し考慮すべきなのではないだらうか。

そつ言つても、2人は笑うだけだつた。

第4話 女性の両親に挨拶…つて別にやつてつて関係ではない。（後書き）

作「質問」一なー

龍「感想に質問は無かつたようだが？」

作「いやいや、質問が無くとも答えるのもー。」

龍「……さうか。がんばってくれ」

作「おうー。どつかで見たことある『気がする』ヒーヒーですが、改訂版では無いほうのに改造を加えてそのまま書きました。べ、別に手抜きじゃないんだからねー！」

龍「いや、どう考えても手抜きだ。というか、噛んだ時点で微妙に動搖してゐから、まる分りだろ」

作「…………ネタが通じないって寂しいね

誤字・脱字のいじ報告お願いします。

第5話 人間の不安の心から妖怪は生まれたそ�だ。（前書き）

べ、別に手抜きじゃないんだからねつ！

……『ジヤヴとか気にしたら負けですので、悪しからず。

7 / 7 修正

第5話 人間の不安の心から妖怪は生まれたそうだ。

「隣、いいですか？」

俺が部屋の窓から見える星を見ながら、考えに耽つているとメリリアさんが声を掛けってきた。部屋はメリオ村にあったものよりも広く、また家具類もきちんとあつた。メリオ村の家は元メリリアさんの家で、今は国王からの招集もありここに引っ越しをしたそうだ。

それはそうと、メリリアさんはいつの間にか部屋に入つていたらしい。気配を感じられなかつたなど、一人前の武人として決してあつてはならぬことだ。と言つても、気配を感じられなかつた原因は分かつてゐるが。

ちらりと後ろにいるリリアさんのほうを見て頷くが……クラシスさんたちも一緒だが、この世界の人には世間体とか、羞恥心とかそんなものはないのだろうか。今日、初めて会つた男がいる部屋に寝間着で、しかも夜に来るのはさすがに拙いだろ？……いや、俺は女性との交友があまり無かつたから、案外こういうのが普通なのかもしない。

「星が綺麗ですね」

メリリアさんが俺の隣に来て、夜空を見上げながら言つ。同じようく空を見上げると、幾億もの星たちが輝きを放つていた。

本やテレビなどで、宝石を散りばめたようなという言葉をよく聞くが、俺は今初めてその意味が分かつた気がする。今までの元の世界の夜空も綺麗だつたが、こつちの世界の夜空は綺麗といつ言葉では言い表せない。まさに風光明媚の言葉が相応しい。

そんなことを思いながら、メリリアさんの言葉に頷く。そこから互いに言葉を紡ぐことはせずに、部屋に静寂が訪れる。しかし、出会い

つたばかりの人との空氣にしては、あまり緊張しなくていいものである。というか、逆に安心できる。まあ、今は深いことはどうでもいいか。

「何を考えていたんですか？」

どれくらいの時が流れたのかは分からぬが、唐突にメリリアさんが切り出す。いや、どちらかと言えば切り出す機会を窺つていたのだろう。

しかも、俺が考え事をしていたのはお見通しのようだ。これだけ読まれているということは、一生メリリアさんには勝てない気がする。にしても、短時間で読まれるよつになる俺も俺か。

「今日は色々とあつたなと思つて」

苦笑いをしながら答える。今は自分の内心を隠すのさえ煩わしく思える。本来はメリリアさんはあくまで恩人であり、同時に最も俺を危険に巻き込みそうな人物であるため、出来るだけ自分の内を隠して相手の内を探り、己の優位な方向へと話をしなければならない。だが、今はそんなことどうでもいい。

ここに来るまでの出来事を思い出していく。

まず、突然に自分の知らない場所にいるところから始まり、高度な訓練を受けたであろう軍人で美人な女性に救われ、自分の知る場所に戻れないかもしれないから資金集めのためにギルドには登録する。しかし、それでも冷静でいられたのは偏に、昔から無茶苦茶に俺を鍛えてくれた爺さんの御蔭おかげだ。何の心構えもなくこんな状況に陥つたら、普通は精神をそのままの状態で保つことすらままならないだろう。

だからこそ、俺をここまで鍛えてくれた爺さんには本気で感謝をしなければならない。

でも、もつ爺さんにも、義父さんにも義母さんにも姉さんにも会えないかもしれない。普段は深く考へることがなかつたが、離れてみて初めて分かることもある。

結構、神林の家族のことも大切に想つてたことを知る。あくまで感謝をしている延長線上で大切に思つてはいるだけだと思つていたのだが、こういう状況だからこそ心の底から感情が溢れる。

もう、会えないかもしない。「冗談でも夢でもない。ましてや、本やテレビの出来事でも自分とは関係のない遠い出来事でもない。紛れもなく俺の目の前に突き付けられた、あまりにも冷酷な現実。だとしても、ここでそれを考へても何が変わるものでもない。寧ろ、気分が下がつてマイナス思考になる。それだと状況を打破できる妙案も浮かばないというものだ。

だからこそ、俺は不敵に笑みを浮かべた。

「そうですか」

メリリアさんは俺の表情を見ると笑顔を見せた。

（～メリリア・リスト・コード～）

今日は素敵な出会いをした。今までの人生の中で、最も素晴らしい出会いの一つであると言つても過言ではない。それこそ、両親との出会いに勝るとも劣らない。

彼に出会ったのは、実家の清掃をするために故郷へと帰る途中の森の中での出来事だ。

私が“それ”を見たとき、**畏怖**^{いふ}の念を抱いた。

森の中でただ一ヶ所だけ、天からの加護を受けているかのように光が包み込み、その光の内とこちらの世界とを区切るかのように剣が地面に刺さっていた所があった。あまりにも幻想的で魅惑的で神聖で、ただの光景なのに誘惑されているような錯覚すら覚えた。

その時、私は光の中心に横たわっている人物 タツヤ・カンバヤシを見つけた。そして、同時に勘が告げる『あれはどんな人種でもない。強いて言つなら神族に近いが、それとも違う。言つならば、本物の神』と。

最初はその光景の中に自分が入ることを躊躇^{ためら}つたが、誰かが倒れているのでそうも言つてられなかつた。

近づいていくたびに、自分が神域を侵^{おか}しているような感覚に囚^{いの}われた。それでも、ようやく彼の許にたどり着いたときには、空気がいつもの何の変哲もない森へと戻つていた。

そのことに少しだけ警戒を覚えつつも、倒れている人物の様子を確かめようと彼を見る。すると、彼はすぐ^{いそ}く綺麗な顔つきをしていた。私が若い男性とあまり接していないことを鑑みても、タツヤさんの顔立ちは美しかつた。男性には失礼かもしれないと思ったが、自然とそんな風に思つていた。

簡単な検査魔術を行使すると彼は特に悪いところなどなく、ただ眠つてゐるだけだつた。続けて辺りへの調査魔法を使い、他に倒れている人物か倒れた原因となりそうなものを探す。しかし、それらしきものは見当たらない。それを確認すると彼を馬に乗せて、家へと向かおうとした。

しかし、彼の周りにあつた剣をどうするか迷つた。最終的にこのまま放置しておくわけにはいかないと想い、11本の剣を拾う。

馬を走らせている途中で目覚めるかとも思ったが、そんな様子は皆無でぐつすりと眠っていた。この時は単に鈍いだけかと思った。

しばらくしたら田が覚めるだらうと想つては、倒れていたのは空腹によるものかもしれない、料理を作つて彼が目覚めるのを待つていた。

しかし、待てども彼は目を覚まさず、2日が経過しても彼が目覚める様子がないので焦つていた。診断の失敗かと思い、何度も何度も精密な検査を行うが、結果は同じ。

そろそろ首都に戻り治療術に長けている神官にでも見せるべきか、と考えていると彼は目覚めた。

彼が敵国のスパイという可能性がなかつたわけではない。しかし、その心配はほほない。なぜなら、起きた後に私の料理を食べて平気だつたからである。

料理には食べた相手が術者にとつて敵意を持つていた場合のみ、麻痺性の毒が発動するように術を仕込んでおいた。それが反応しないところとは、少なくとも現時点では敵対する気がないということである。

私はそれなりに知られた名だつたし、戦場でもかなりの戦果を挙げていたので敵国のスパイなら間違ひなく警戒するだらう。それは慢心でもなんでもなく、ただの事実である。もし、スパイだとしても私の顔を知らないならば、その者は取るに足らないということだ。

彼は記憶喪失だと自分のことを説明した。

私にはそれが嘘であることはすぐに分かつた。これでも城内では政治的な役割もこなしてきたのだ、相手の嘘はある程度見抜ける。

しかし、私は特に追及をしようとは思わなかつた。違う、思えなかつたのだ。どういう理屈でもない。ただ彼の言葉に逆らおうとは思えなかつた。

かと言つて、さすがにこのまま彼を受け入れるのは拙いと思つた。

なので、あくまで利用できる可能性が高い者として、友好的な関係を築くことにした。

私が彼のことを警戒しなくなつたのは、そのときからだらう。

私は必要以上に相手との関係をもとつとは思わない。それは自分の弱点になるからだ。点を見せれば即座に喰われる。生き残りたければ弱さを決して見せず、相手を信頼せず、己おのが目的のためにだけ動く。

私が過すぎして王宮みやことはそのような場所だつた。本当に醜い場所だ。自身のことしか頭になく、如何に上手く立ち回るかを考えるような輩しかいない。

そんな場所で生き抜いてきている私が警戒を解くといつのは、自分でも信じれることである。だと、頭は冷静に疑問を投げかけていふといふのに、私自身はそのことに何の不快さも感じていない。

そのことで彼に興味が湧いた。

まさか、家で両親があなんことを言つなんて、思つてもいなかつた。あ、あのことはつ！

さすがに予想外すぎて私も上手く反応できなかつたといふか。だつて、まだ会つたばかりの男性ですよ！ いえ、会つたばかりでなればいいか、と聞かれればそうではないんですけど……。

あ、別にタツヤさんのことが嫌いというわけではなくてですね。ただ、その……。もう少しお互いのことをよく知つた上で行うべきであつて、急に、結婚なんて！ ！

はあ、私は一体誰に言い訳を言つてるんでしょう？ ？

ゴホン

夜は彼の部屋を訪れた。何となくそんな気分だつたのだ。最初は着替えてから訪ねようとも思つたが、あえて着替えずに行つた。だか

うと言つて、深い意味があるわけではない。

もつとも、その時は何となく彼を訪れたいと思う自分に戸惑って、監視のためといつ名目にしてたのだが。さすがに意味も無く部屋を訪れるのは心が納得しても頭が納得しない。

は、ここだけの話だ。

話しかけてみると、彼は苦笑しながら私の問いに答えた。その表情はとても晴れやかで、不覚にも……その、か、か、かつこいいと思つてしまつた。

もちろん、これは完全に私の男性に対する耐性なさが原因なんですが、そもそも、そんな機会が皆無と言つてもいいのだから仕方ないと言えは仕方ないのだ。……同期で結婚していないのは、私だけじゃないはずですよ!!

話に戻す。

一度、彼のことをそんな風に思ってしまってはどうあるとも出来ない。かと言って、私はこの気持ちを無かつたこととする出来ない。

とにかく、明日は彼をギルドに登録してから、そのまま一緒にクエストに行くことになるはずだ。

内心はかなり亢奮である。今晩寝付けむかも分からぬ。しかし、明日のクエストのためにも早く寝て、体調を万全にする必要があるのは言うまでもない。

これは由々しき事態である とにかく 今からでも寝床に入つて寝るよう努めべきだう。

なので、今田は「これで終しまこととする。」

「んなとこねですかね」

手に持つた羽ペンを置いて、今日の分の日記を見直しながら、私は満足して頷きます。

基本的にこの日記には楽しさとしか書かれていません。それは私が辛いときや、苦しきときに見て元気をもらつためです。と言つても、今現在のところ殆ど頁は埋つてませんが……。

……だとすると、これは日記というのは適切ではないかもしません。それに書くと言つても頭の中に思い浮かべたとおりに筆記具を動かすので、他の方とはやり方が違うかもしませんが。いえ、細かいことを考えるのは止しましょう。今日は素晴らしい日なのでですから。

「ふう」

思わずため息が漏れます。

それは疲れからくるものではありません。あまりにもおいしい料理を食べたときなどの幸福からくるため息に近いです。

「タツヤさん」

名前を呼ぶと、頬が赤くなり熱を持つのが分かります。いえ、頬だけでなく顔全体 延びては全身が熱くなっています。
たぶん、今の私の表情はニヤニヤとしたものになつてているでしょう。こんな顔では決して他の人 特にタツヤさん の前には出れません。そんなことをすれば、私の尊厳だとあってないようなものです。

本当に耐性がないところのは困りものです。

「あ、明日のために早く寝る」と口にしあげておしゃづけ

私は言つ必要のないことを口にしながら、ベッドの中に入ります。

いつもなら、すぐに元気なことが出来る、といつか、出来なければいけないのですが。

しかし、田を開じると、タツヤさんの顔が出てきて私は再び顔を真っ赤に染めることになりました。何と言いましょうか、我ながら本当に情けないとありますか、どうしようもありません。

早くなった鼓動を感じながら、私は枕に顔を埋めます。

「タツヤさん」

止せば止のに、私は再び名前を呼びます。さらに加速する鼓動。全身に血がいきわたるのを感じます。

ですが、鼓動の早さに対する不快感は皆無で、どちらかと言えば心地よく感じられます。もしかしたら、病気かもしれませんね。なおのじと、早く寝ないといけません。

だと言つて、私の鼓動は全く治まりを見せませんでした。

第5話 人間の不安の心から妖怪は生まれたそうだ。（後書き）

作「……話が進んでない。」

龍「しかも、旧版の使いまわしだし」

作「ち、違うんだ！ 同じような展開になるから、似るのは仕方ないんだ！」

龍「誤魔化したいなら、せめてセリフを変えるよ」

作「……あ」

誤字・脱字の「」報告をお願いします。

第6話 女性に翻弄される事ってない……かな？（前書き）

文字数が少ないなら連投すればいいじゃない。

とこいつは、2日連続で更新です。次回更新は田羅田かなー、と。

6/21 サブタイ修正

第6話 女性に触れられる事つてない……よな？

「…………ん？」

違和感に気づいたのは、異世界に来たので体調の変化を知るために精神統一をしていた時だった。精神統一は心を清め落ち着かせるだけでなく、自己の体調の変化を見逃さないためのものもある。無論、これは？林流に該当することなので、他の流派はどうなっているのかは分からぬ。

泊まった部屋で正座をし集中をしていたのだが、いつもとは違う感じがした。まるで体の中に今までになかった何かがあるみたいだ。物理的な意味合いではなく、精神的なものだと思つ。

しかし、それはあるだけで別段どうということはない。嫌な感じがするわけでも、力が湧いてくるような感覚があるわけもない。

「なんだ、これ？」

疑問を口にするが誰も答えてくれる人はいない。まあ、誰かに答えて欲しかつたということでもないのだが。

そう言えども、爺さんが昔に言つていたことがある。『氣とはある目にふと感じられるようになるものだ』って。俺自身、そんなことはあまり信じていなかつた。

しかし、爺さんがあの歳であれだけの動きをすると考えると、本當にあるんだろうかと思えてしまう。いくら師範とは言え、氣でもなければ年齢的にあそこまで動ける説明ができない。

「これが、ね」

意識を集中させると、手足のよつに自由に動かせる……よつな気がする。正直、見えないために感覚に頼っている。なので、どうしても本当に動かせているのか確認が持てない。

とりあえず、外に溢れないようにして体の中で循環させておく……イメージを持つておく。本当に出来ているのかは、俺には分からない。というか、これが氣という証拠もないのはどうにもならないが。全身に血液が行き渡るみたいな感覚があり、痺れが体中を襲う。つまり、正座して立ち上がりときの感覚だ。それが全身に。不快なことこの上ない。といふことは、これは血液に近しいものなのだろうか。

しかし、その感覚は5分もせずに治まる。

「よし」

それを確認すると俺は部屋を出た。ちなみに昨日の今日で服を用意出来ず、昨日のまま つまり、俺がこちらの世界にやつてきた寝間着である。しかし、寝間着と言えど動きやすいものなので大した問題ではないが。

今朝は、まだ陽が昇つていない時間に目覚めていた。一日の長さなど気になる点はあるが、同じだと考えた場合は体内時計でいつもより10分ほど早かった。しかし、長期的に眠つていたのでズレている可能性が高いな。

精神統一も程々に鍛錬を行うことにする。いつもは学校があるので基本的なことしか行えないのだが、今は異世界であり学校などは関係ない。

メリリアさん家は裏庭があるよつなのだが、それも家と同様にかなり広かつた。これは昨日の夜に窓から眺めていて気づいたことだ。勝手に使わせてもらつていいが、たぶん問題ないとと思う。いや、一応、後で聞いておくべきだね。何かあつた後では取り返しがつか

ない。

それと、これも昨日の夜に気づいたことだが、どうやら俺と一緒に落ちていた刀は真剣だったようだ。最初は爺さんが買い込んでいたような観賞用の刀だと思い込んでいたのだが、試しに抜刀してみたら見事に真剣だった。戸惑つたが、ギルドに登録するのだから好都合と割り切った。

刀に関して昨晩にじっくりと調べてみたが、これといって情報は得られなかつた。刀 자체も良い刀ではあるようだが、一流から一流の作であり名刀と呼べるようなものはなかつた。

「ふう」

一通り型を確認し終わる。型とは言つてはいるが、実のところ？林流に型というものはほぼ存在しない。無いわけではないのだが、使いどころが難し過ぎて使えるようなものはない。

訓練の最中に気付いたことがある。最初は違和感だけだったのが間違いないようである。

身体能力が遙かに向上している。これは素直に喜んでいいのか微妙である。今までの十年以上の鍛錬が一瞬で無に還つたような気がしないでもない。しかし、身体能力が上昇したのか単に重力が小さいだけなのか、ここは知つておきたいところではある。

「タツヤさん！」

メリリアさんの呼ぶ声がする。なぜだが声に焦りがあるように感じられる。これは本能的な直感に近いもので、別に証拠などがあるわけでもない。

何かあつたのかと思い、急いでメリリアさんの声がする場所へと向うことにする。刀を鞘へと戻し腰にぶら下げる。11本全ての刀を帯刀するのは無理だが、念のために依頼の時は三振りは帯刀してお

くことにしよう。

裏庭から声のする家の正面玄関の方へと移動を開始する。その間にもメリリアさんの焦つたような声は聞こえ続ける。余程、焦つているようで、魔術を使うことすらしていないうつだ。

メリリアさんの許に着くと、やはり焦つた様子で俺を探していた。

「メリリアさん…どうしたんですか？」

「タツヤさんッ！！」

メリリアさんは俺の姿を見つけるなり、いきなり抱きついてきた。さすがに飛び込んできた女性を回避するのも駄目かと思い、そのままメリリアさんを受け止める。見た目通りと言つべきか、それとも軍人にしては意外というべきか、メリリアさんはとても軽かつた。飛びつくと、メリリアさんは俺の胸元に顔を埋め、嗚咽を漏らし始める。急にこの状況に陥つたら、理解できなくとも仕方ないはず。

「大丈夫ですよ、大丈夫」

しかし、理解できないから行動しないのは違つ。理解できなくとも出来ることはあるのだ。

俺は昔、母さんにしてもらつたことをそのままメリリアさんに行つ。俺が泣いているといつも俺を膝に座らせて『大丈夫だよ、大丈夫』と泣きやむまで頭を名で続けてくれた。

母さんとの記録の中でも最も印象深い記録に分類される。

「一体、何があつたんですか？」

出来るだけ優しい声で問いかける。泣いている人に強く迫つても意味がない。むろし、逆効果であるのは誰でも知つてのことだ。

胸元に顔を埋める瞬間に見えたメリリアさんの切羽詰つて、今にも泣き出しそうな表情は只事ではない。もしここで俺までメリリアさんの行動に戸惑つたりしたら、その気持ちはメリリアさんにも伝わり、状況はさらに悪くなるかもしない。

「起きたら、タツヤさんがいなくて」

ああ、逃げられたと思われたのか。

なんて、普段の俺なら冷静に分析するのかもしないが、この時はそうは思わなかつた。メリリアさんが本当に心配していたのが伝わつてきた、などと言つことはないが、メリリアさんの涙 자체は悲しみからくるものなのだと神林 龍哉には理解できた。

しかし、だからと言って本当に同じ涙なのかは分からぬ。人の悲しみや苦しみなどは、他の誰かと比べられるような軽いものではないからだ。

「メリリアさん？」

メリリアさんの肩に触れようとすると、メリリアさんの肩がすくなく震えていることに気がつく。その震え方は泣いているというよりも、怯えているという捉え方が正しいように思える。

俺は肩に触れるのを途中で止めて、再びメリリアさんの頭を撫で始める。何度も何度も、ゆっくりと丁寧にやつていく。しばらぐするとだいぶ落ち着いてきたようだ。

「取り乱してすみません」

微妙に頬を赤らめながらメリリアさんは俺に頭を下げてきた。綺麗に腰を折り、すく見事な礼である。どうやら、この文化にも礼があるみたいだ。いや、もしかしたら誰かが伝えたのかも知れない。

「いえ、気にしないでください。迷惑じゃなかつたんで」

それよりも気になることがある。
それはメリリアさんの怯えようだ。勘違いだという可能性もあるが、
一応、頭に入れておくべき情報ではあるだろう。しかし、余所者の
俺が聞くべきことではないため、『あらから尋ねるよつた真似はし
ないが。

「あ、今日はギルドに登録に向かうことにいたしました。私はこ
れから仕事があるので今からは無理ですが、昼からは空いているの
でその時にギルドにいらっしゃつてください」

「分かりました」

「登録後は、最初ですし一緒に簡単なクエストにまつりましょう。
それではそろそろ時間なので失礼します」

メリリアさんは未だに頬を赤らめたまま、仕事へと向かっていった。
俺は手を振つてそれを見送る。

……前を向いていな「よう」だが、大丈夫なんだろうか。

第6話 女性に触れられる事つてない……かな？（後書き）

作「質問」一なー「

龍「最早、何も言つまいて」

作「む、それはそれで悲しい…」。

さて、今回は『メリリアさんじましたー?』とこいつとですが

龍「さすがにいきなり過ぎる」

作「やっぱ、作者には伏線とか無理ですよ……」

龍「伏線？あれって伏線のつもりなのか？何の？」

作「いや、そう言わると、違うような気がしないでもない……」

龍「ハツキリしろ」

作「まー、今後関係あることは確かです」

龍「適当だな。悪い意味で」

作「適当ですよ。良い意味で」

誤字・脱字の報告お願いし致します。

第7話 方向音痴だなんて、そんなバカな……。（前書き）

久々の更新だあ！！

しかし、来週の土曜日にも用事が……。

いづなれば、土曜日になる前に書き上げるしかない！

にしても、文字数が少ないな……。1042文字くらい。

第7話 方向音痴だなんて、そんなバカな……。

早朝の喧騒、とでも言ひべき光景が広がっていた。

商人たちが忙しなく客に声を掛け、客たちはより良い品をより安く買おうと右往左往したり。中には商人と直接交渉し値下げをしようとしている者までいる。他にも数人で輪を作り、世間話をしているところも見受けられる。さらには商人同士で話しあい、売れ行きや原価を鑑みてどの商品が売れそつなのか、どのくらいの値段にしようかと悩んでいる者たちもいる。

俺が現在いるここは、エリアと呼ばれる首都ローリアル最大の市場であった。市場とは建物で商品を販売するのではなく、路上販売を集団で行うものだ。

さて、なぜここにいるのかといつて、きちんととした理由がある。

メリリアさんを見送つたあと、食事を行うために昨日夕食を食べた部屋へと向かつた。クラシスさんかメチルさんに街のことを聞こうとしたのである。ここで禁止されている行為などがあつたら、知つておいた方がいいと思つたのだ。

食事をした部屋 ダイニングにはクラシスさんがいた。椅子に座つて陶器のようなものでお茶を飲んでいた。休憩をしていたようなので、声を掛けるのを躊躇つているとクラシスさんの方から俺に気付いた。

「あら? おはよう、タツヤさん。」と飯食べてないでしょ? さて、早

く席に着いて「

クラシスさんは俺の意見など聞こえさせず、台所で料理を作り始める。いや、純粋に料理を作つてもらえるのはありがたいのだが、全く俺の意見を聞かれないのも何だか腑に落ちない。だからどう、というわけでもないが。

言われた通りに昨日と同じ席に座る。机は木で出来ていていたが、そこまで年季を感じさせるものではなく、ここ最近購入したであろうことが分かる。もしかしたら、魔術のお陰で酸化をしないのかかもしれない。しかし、あまり科学技術が発展していくなさそうなのに酸化を知つているのはおかしいので、やはり最近購入したものだろう。などと、くだらないことを考へてゐる間に料理が机の上に並んでいく。その速度は“凄まじい”の一言に尽きる。

こつちの世界に来てからは身体能力と共に動体視力も向上しているため、今のクラシスさんの動きがきれいに見えるが、もし前の世界のままだつたら田で完璧に追えていたか怪しいところだ。

これで冒険者ではなく普通の主婦なのだから、この世界の異常性がうかがえる。元の世界でこれだけの速度で動けたら、格闘界で頂点を目指せるのではないだろうか。

「さて、召し上がり」

さすがにクラシスさんも朝食ということを考えているようで、昨夜ほどの量は準備されなかつた。朝から昨夜のような量を用意されても食べきることなど出来そうにないが……。

昨夜は量に圧倒されていたり、誤解を解くために尽力していたので、あまり料理のほうに意識を向けていなかつた。しかし、今見ているととても芸術性に富んでいる。

だとすると……メリリアさんの料理はやはり前衛的な料理だつたのだろう。味 자체に問題はなかつたので、そこはメリリアさんの芸術

的な感性の問題だと思われる。

「いただきます」

食べるにはフォークとスプーンらしきもので使う。しかし、前に来た人物がいるのなら箸を伝えて欲しかった。日本人である俺には箸のほうが扱いなれている。

料理を食している間に自身の用件を済ませてしまおう。時間は有効的に使わなければ。多少の行儀の悪さは、作法にうるさい爺さんがいないので、この際無視だ。

「そう言えば、この街ではいけないことがありますか？俺はここに来て日が浅いんで、あまりそういうことを知らないんですけど」

「うーん、そうねえ……。大きな街だと一緒だけど、喧嘩ケンカとか争い「」とは禁止。他には、あ、堂々と奴隸を買うのはダメ。この国では、一応禁止しているからね」

暗に大きい街じゃなければ争いバトルが認められている上に、この国以外では奴隸が容認、この国でも黙認ということか。うーむ、聞いた限りでは特に気をつけないといけないことは無いな。

む、このトゲトゲしたものは美味しいな。見た目からして昨日見た棘のあるキャベツのようなものだらう。何事も見た目で判断するのはよくないな。

「向こうから喧嘩を売られた場合はどうすればいいんでしょうか？」

「出来るだけ戦わないほうが良いけど、あまつ鱗ヒナにならないうつになら迎撃しても大丈夫だよ」

それなら心配はない。目立たなければいいのであれば、手段はいくらでも存在する。例えば、あまり人気のなさそうなところを歩いたりすればいい。多少の危険はあるが、目立たないのにはもつてこいだろ。

にしても、この赤い果実も美味い。^{美味しい}大きさや形状を見るとトマトに近い。しかし、中はトマトとは違い少しだけパサパサしており、水分量が少ない。ま、それでも美味しいのだが。

「ううそうさまでした」

「お粗末様でした」

話しているうちに全ての料理を食べ終える。どれも美味しく、主に日本食しか口にしない俺には新鮮に感じられた。と言つても、日本料理以外で食べたことがあるのは、イギリス料理くらいだ。この料理もイギリス料理とは違つた良さがあつていい。

思考がズれた。

長期間か短期間かは分からぬがこの街で過ごすのならば、この街の造りや様子について知つておくべきだろ。それなら、少しでもこの街を知るために街を練り歩くべきだろ。

「この街で見ておいたほうが良い場所や近寄らないほうが良い場所つてありますか？」

食器を流しへと持つていく。この街は下水が整備されてあるようだ、台所に普通に流し台がある。ただ、上水はまだ整備されていないらしく、水汲みは各自で行わないといけない。

俺が食器を運ぶのを見て、クラシスさんは水の入った桶おけを持ってくる。水は桶の三分の一くらいしかない。まだ予備の水はあるようだ。

ので、これを使つてしまつても別段問題はないだろ？

「ヒリア 市場には一回行つてみるとこゝ。あそこには國中から
色々な品物が集まるからね」

それは是非とも行かなければならぬ。國中から品物が集まるとい
うことは、國中から情報が集まるのと同義語である。そこなり、何
かしら元の世界についてのことも聞けるかもしない。

さらじ、この世界のものを見れるのはありがたい。自身が知らない
ものは少ないほうが多い。知識がなければ、あらゆる状況に対応で
きないからだ。

「それと、街の中心にある城から遠くに行くのはあまつよくな
離れれば離れるほど無法地帯になるからね」

慣れた手つきで食器を洗いながらクラシスさんは答える。
にしても、城から離れれば離れるほどつてどれだけ分かりやすいの
だらうか。まだ一つの区画に集まつていてとかなら分かるのに。

「分かりました。ありがとうございます」

クラシスさんにお礼を言つて、家を後にした。無論、街を見て回る
ために。

しかし、この時、俺は異世界といつてもあつ重要ことを忘れてい
たのである。

俺、実は方向音々……この街の造りを把握していなかつたのだ。

そういうわけで、歩いていたら市場らしきものに着いていた。無論、適当に歩いていた。悪い意味で。

途中で見知らぬ親切な方が困っている俺に声を掛けて裏路地に連れて行かれたが、その後は市場の位置を快く教えてくれた。……クラシスさんの言つた注意は守つてゐるから大丈夫だ。

にしても、賑わい方が凄いの一言に尽きる。俺が住んでいたところが都会ではなかつたにしろ、この賑わい方は凄まじい。と言つても、何も人数が多いから凄まじいというわけではない。

例えば

「ちょっと、これ向こうの店より高いわよ。向こうがこれより銅3枚安かつたから、銅4枚下げたらいいんじゃない？」

「いやいや、これは向こうの店よりも上物でしてね、これ以上下げたらこっちも限界つてくらいにさげるんですよ。ほら、見てくださいよこの艶^{つや}ー！向こうとは比べ物にならないでしょ！」

「確かに艶はいいけど、少し小ぶりじゃないかしら？」

「小さい分、美味しさが凝縮してゐんですよ。しかし、奥さんは中の選眼^{せんがん}だ。情報を教えてくれたお礼と言つちゃなんだが、銅1枚下げるんでどうでしょ？」

「まあ、それなら置おうかしらね

「毎度ー。」

とまあ、密と商人による熱い（？）戦いが繰り広げられているのである。当然、今のはかなりマシな部類でさらに高度な駆け引きも行われているところも存在する。買い物一つにどれだけ真剣なのだろうか。いや、両方とも自分の生活が掛かっているのだから、真剣になるのは当然のことなのだろう。

そんな中を歩いている俺にも声が掛かるのかな、と思つていたのだが、他の人に声を掛ける割には俺に声を掛けてくるような商人はない。というよりも、何故だか変に注目を浴びている気がする。いや、声を掛けられないのは断る苦労がないので、ありがたいと言えればありがたいのだが、注目を浴びているのはよろしくない。あまり目立つのは避けたいのだが。

その後も市場を歩き回っていたのだが、さすがにこれ以上注目を浴びるのはよくないと判断したので、この場から撤退することにした。

まあ、撤退しても行くところがないので、適当に歩くことになつたのは仕方ないだろう。

さらに、城の位置など気にせず歩いていたのも、この街に来てから浅かつたため仕方ないだろう。加えて、市場でどうして注目を集めていたのか考えていたのも、あまりにも不可解だったので仕方ないだろう。

さて、何が言いたいのかと言つと

ここ、何処？

第7話 方向音痴だなんて、そんなバカな……。（後書き）

作「質問」一なー」

龍「今回はなんだ？」

作「いやね、文字数少ないな、と」

龍「増やせばいいだろ？」

作「そしたら、区切りが悪くなるんだよ。
次は長くなりそうだし」

龍「それをどうにかするのが、作者の腕の見せ所ってやつだ」

作「難しいことを言つてくれる……」

龍「にしても、若干雑になつてないか？」

作「うつ。

正直なところ、時間空けたせいで何を書きたかったのかよく思
い出せなかつたんだ」

龍「人、それを愚か者と言つ」

作「……最近、周りが冷たい。

あ、それはそうと、実は読者様にこの小説のタグを考えて頂き
たいのです！

理由としては、作者のセンスの無さが酷すぎるためです。

もし、この意見がなければ、この小説のタイトルを考えた友人が
苦労するだけですので、気軽にこの意見願います」

誤字・脱字の報告お願い致します。

第8話 チートってイカサマやつかない行為のじじい。（前書き）

さて、第8話！

にしても、前作に未だ追いつかなければどうぞ！

書き方變えてみました！
ご意見、お願いします。

7/10 修正

第8話 チートってイカサマやすむこ行為の「じりじい」。

周りの建物はボロボロで、地面は舗装されていない。

さらには、道の左右に幾人も人が倒れている。

これだけ衛生環境が悪ければ、生きるのだけでも相当大変であることが窺える。

どうやらここら一帯は俗に貧民街スラムと呼ばれるような場所らしい。クラシスさんが言つていた無法地帯とはここのことなのだろう。確かに、これだけ荒れているような場所にはあまり近づかない方がいい。

ここに住人は生きるために何でもやりそうな雰囲気がある。

しかし、さつきから気になつてているのだが、周りからかなりの視線を感じる。数えただけでも20以上。

こちらを狙つてはいる、というよりは好奇心による視線に思える。まあ、数がいるので、少しだけ警戒しておいた方がいいかもしれない。

その中を急ぐわけでも、ゆっくりとするわけでもなく歩いていく。こういった場合は、下手に急いだりすると何かしら絡まれ易い。なので、ペースを崩さずに歩く。

途中で城が見えたのでそちらの方に歩き始める。

クラシスさんが街の中心に城がある、と言つてはいたのでそちらに進めば一先ず大丈夫だろう。

うーん、それにしても目立つ理由が思いつかないのに、着実に視線の数が増えてきている。今で40以上。

まだ囮んだり好戦的な視線でも送つてくれれば、対処の仕方も簡単なのだが、向こうはこちらを見ているだけだ。

正直、やり難い……。

そんなことを考えていると、周りの風景が段々と変化していくことに気付いた。

ボロボロの家はきちんとした住居になつていい、道も次第に舗装された道へと変わつていぐ。このままいけば、無事に家に帰れるかもしれない。

そして、こちらを観察するような好奇心の視線もかなり数が減つてきていた。どうやら貧民街から出る気はないようだ。

それにしても攻撃どころか接触すらしてこなかつたので、何がしたかつたのかよく分からない。

見慣れないやつだつたから、警戒をされただけだろうか？

ここで考えても答えが出るわけでもない。

なぜ視線を集めたのかは早急に原因を突き止めるとして、今はメリリアさん家への帰り道を探そつ。

と、そこで俺はある看板を目にした。

看板は表通りから小道に入ったところにあつた。

当然、そうなれば見つけにくくなるのだが、この街の地理を確認するためにキヨロキヨロとしていた俺には発見できたのだ。

何か興味を惹かれるようなことが書いてあつたわけではない。どうが、俺はこの言語を理解していないため、何が書かれるのか分からぬ。

それでも無性に興味が湧いた。……これは俺の悪い癖が出たようだ。

どうやら俺には、何でもないものに無性に興味を惹かれる癖があるらしい。

無論、興味を惹かれたものがおもしろいわけでも楽しいわけでもない。

どういつ理由かは定かではない　自分自身で把握できないが、たまにそういう時がある。

以前は、輪ゴムを2時間くらい弄つていたこともあつた。

今回もその類のようで、特段目立つわけでもない看板に興味を惹かれて小道へと進んでいく。

さつきの貧民街に比べては、道もきれいに舗装されているし建物も立派だ。

しかし、メリリアさん家に比べればかなり見劣りする。王家直属相手に比べることが間違いか……。

看板があるところまでやつて来る。やはり近くで看板を見ても全く読める気がしない。

しかし、今は些細なことなどあまり気にはならない。

店　　見た目は完全に民家の扉を開けて中に入る。木製の扉で予想していたよりも力を要した。

店内を見渡すと、用途が想像も出来ないような物が多く存在していた。

水晶や様々な色の液体が入った瓶、何かの骨、不可思議な形状の植物、ホルマリン漬けであろうナニカ、液体に浸っている眼k y : いや、さすがに見間違いか。あ、こっち見た。

見た限りでは俺以外に人の姿が見えないので、客の入りはあまりよくないうつだ。

「おや、御身分の高い御方がいらっしゃるなんて珍しいこともあるだねえ」

店の奥から声が聞こえた。その嗄れた声には威圧感といつべきか、声そのものに彼女の歴史を感じさせる。

奥を見ると、独特の衣装に身を包んだ白髪蒼眼の老婆が立つていた。

見た瞬間に理解できる。いや、強制的にも理解させられてしまつ。

“この人には勝てない”

それは戦術的なものでも戦略的なものでも知略的なものでもない。言うなれば、人としてこの人に勝つことは出来ない。こう思う人物に直接出会うのは爺さん以来2人目になる。

「いえ、身分が高いってわけではありませんが」

「おや？ そうなのかい？ そんなローブ着てるから、貴族の方かと思つたんだがね」

ローブ？

ああ、慣れてたから完全に失念していた。 そつが、俺はローブを着てたんだ。

なるほど、これで市場の人達や貧民街の人達の視線が俺に集中していった理由が分かつた。

街に出るときは脱いこうかな。

「これは頂き物ですよ。 ところで、ここはどいつのお店なんですよ？」

「看板を見てないのかい？」 這是占いの店さ

いや、看板読めないんですね……。

ふむ、占いの店か。

占いと言えば、途中で内容が変わったりいくつかに派生したりするが、古代からずっと受け継がれているものの一つである。 にしても、この文明で占いが商売として成り立つのも珍しい。 どちらかと言えば、王宮に従属していると思っていたのだが。

「あまり想像が出来ていないうだね。 少し待つてな」

そう言つと、老婆は店の奥へと入つていく。

……独特的衣装は如何にも動きにくそうなのだが、大丈夫なのだろうつか。

しばらくもしない内に老婆は店の奥から戻つて来た。

「これが占いに使う水晶さ」

持つてきたのは、元の世界の道ばたで見かける占い師が使つてゐるような水晶。方法は同じなのか。

もつと店の棚に置いてあるよつた、骨やホルマリン漬けを使って長々とするのかと思つていた。

「占い」というのは、水晶を使って本人がどれだけの魔力を保持し、どの魔術と相性が良いかを判断するためのものだ」

訂正、どうやらこの世界の占いといふ概念と元の世界の占いといふ概念はかなりの差違があるようだ。

「と言つても、ある程度の実力者になると無意識のうちに相手の魔力量が分かるみたいだけね」

商売あがつたりだよ、と田の前の老婆は語る。

確かに何の道具も用いらずに分かるのなら、道具を用いて判別するよりも簡単に済む。そうすれば、占いの意味がなくなるな。

「相性も分かっているんだから、ほとんど占いをするよつたはいないんだけどねえ」

「相性が分かっているんだから、ほとんど占いをするよつたはいないんだけどねえ」

む、質問を外したようだ。老婆は然も怪訝さそうな顔で俺を見る。このけらの世界でも常識的なことを質問したらしい。表情だけでそのくらいは読み取れる。

「……相性はその人の髪を見れば分かるからね」

少しの間の後、老婆は俺の質問に答える。

どうやら俺のことを不審に思ってからじく、微妙に警戒しているのが判る。失敗したかなあ。

この言つときは変に誤魔化さず、ことじん不審なやつになる方がいい。

中途半端に繕つたり誤魔化したりすると、さらに警戒されることになつて余計に面倒くさいことになる。

「髪を見ればとは？」

「髪の色だよ。赤なら火、青なら水、茶なら土、緑なら風、黄なら雷という風になるのさ。勿論、例外もあるけどね。知らなかつたのかい？」

「ええ、記憶喪失なようだ」

実際に判りやすいな。

これで街の人達がやけに色鮮やかだったのも納得出来る。理解は出来ないが。

それならメリリアさんは水の魔術が得意といつことになるらしく。クラシスさんも水、メチルさんは土のようだ。

「記憶喪失、ねえ。ま、いいさ。それよりも、占いをやっていくのかい？ それとも冷やかしかい？」

「一む、占いは是非ともやつてみたい。

魔術が使えるなら、さらなる戦力強化になりそうで非常にうれしい。

戦争もあるようなので、ここでの戦力補強はかなり重要なことである。あ、奴隸を買うのもいいかもしない。
しかしながら、ここに来て根本的な問題がある。

「したいのは山々なのですが、今は持ち合わせがありませんので」

ただ今の財産は零なのである。

当然、商売なのだからそれなりに金銭を要求される。無論、ここのお金で。

元の世界ならこぞ知らず、ここからの世界の金銭は一文たりとも所持していない。

労働をしていないので当然と言えば当然だ。
持ち合わせもないのに店に入ったという奇行をなぜ行つたのか、自分自身もよく理解出来ていながらいつものことなので諦めている。

「……」

老婆は俺を真剣な眼差しで見てくる。威圧しているところよりも、こちらを推し量つてこようだ。

それなら、俺は特に緊張もせずに老婆を見返す。

いつの間にかに変に緊張すると、自分の底が知れるとこつものだ。

「なるほど、それがあんたかい。良いよ、今回は特別に無料で占つむ」

「ありがとうございます」

俺の態度を老婆がどう判断したのかは判らないが、どうやら俺に対する見込みがないというわけではないようだ。

「…」 じつは気に入られていた方が断然いい。何かあったときに頼りに出来るかもしれないからだ。

「それじゃあ、この水晶の上に手を置きな」

言われるままに水晶の上に手を乗せる。

硝子だとは思われるが、それにしてはあまりにも冷たい。むしろ、熱を急激に奪われているような気がする。

しかし、それだけで他に何か変化があるわけではない。どういうことだろうか？

こういった物は、触ると光を発したり何かしらの動きがあるものだと思っていたのだが。

「…」 ここまで何も変化がないとなると、少しばかり不安になってくる。もしかして、俺には素質がなかつたりするのだろうか。

「変化……ないですね」

老婆に声を掛けてみるが、反応が返つてこない。

不審に思つて水晶から顔を上げてみると、老婆は水晶を見て真剣な表情で何やら深く考え方をしていた。

邪魔するのもあれなので、取り合えず手を置いたまま老婆の反応を待つてみることにした。

この間、ずっと手の熱が奪われているような感覚を感じていた。

「なるほどねえ」

老婆はそれだけ言つて、店の奥へと消えていった。放置ですか？

…。

すぐに戻つてくる気配があつたので見てみると、さつきよりも大きい水晶を抱えていた。

大きさで言うなら、サッカー ボールくらいだらうか。

「今度は」さちに手を乗せな

有無を言わせぬ雰囲気で言われたので、大人しくそれに従う。周りから見れば、俺はあまり反応がなく無表情でいるだらうが、本当はかなり戦々恐々としている。

爺さんもそうだが、こういった人格者が真剣に物事をするのは本当に大事な時だ。

それ以外は気を張らず、公私の区別がキチンと出来ている。なので、今回も何かしら問題が起きたと見て間違いないと思つ。

「さちもかい」

老婆はやれやれと言つた感じで首を振る。やはり、才能がなかつたのだろうか。

それにしても、この水晶は間違いなく俺の手の熱を奪い取つている。さつきの水晶よりも凄い早さで。

「さちも、とは?」

「お前さんの魔力を測れない」

どうやら俺には魔力が皆無らしい。

戦力の強化が行えると思つていただけに、その事実は少しだけ堪える。

にしても、魔力が零というのはそんなに珍しいことなのだろうか。

元の世界では普通な気もするのだが。

「それは珍しいことなんですか？」

「当たり前だわ、って記憶喪失だったね。こんなこと普通じゃありえないよ」

珍しきごいの騒ぎではなく、あり得ないらしい。……少し傷ついた。

判断するに、魔力とはこの世界の住人は多かれ少なかれ全員が持っているものらしい。

生命力のようなものだろうか？

「水晶の許容量を超える魔力なんて、どう考えても常識を逸脱しているぞ」

は？

第8話 チートってイカサマやめるこ行為の「じりじー」（後書き）

作「質問こーなー」

龍「大分、書き方が変わったな」

作「スルーかこの野郎。

書き方は、天気雨様のご意見を参考にさせていただきました！
と言つても、作者がちゃんと出来てているかは怪しいですが……
そして、この書き方で気づいたことがあります。

自分は一文が短い、と。

どうしましょう？

龍「そんなことより、前に投稿している分はどうあるんだ？」

作「そんなこと……。

この書き方に慣れて、ある程度上手くなつたら手を加えようか
と

龍「だつたら、書くのに時間を費やせ、と」

作「いや、今ガチでリアルの方がヤバイ
どのくらいヤバイかといつと、今の政権くらいヤバイ」

龍「それは……やばいな」

誤字・脱字の報告お願いします。

第9話 所詮、化け物。されど、化け物。（前書き）

連投です。

ええ、暑いので血毛で引きこもつてます。
いや、冬も引きこもつてて春も秋も……。

き、気のせいだー！

7/10 修正

第9話 所詮、化け物。されど、化け物。

この世界で使われる水晶というものは、特殊な鉱石に十分な魔力と十分な熱量を用いることで初めて完成するらしい。

その際に使われた魔力、熱量、そして元々の鉱石によって水晶の
価値 魔力を測れる量 が決まる。

そして、その価値は水晶の大きさに顕著に表われる。

最小の物では米粒くらいのものから、最大で人よりも大きいものが出来るらしい。

そして、米粒くらいのものは動物などのごく僅かな魔力量を探知し、普通の人間は眼球の大きさがあれば十分に調べることが可能だそうだ。

魔力量が人間よりも多い魔族や天族でも、拳骨以上の水晶を用いればほぼ確実に特定することが出来るようだ。

さて、ここで思い出してみよう。

俺に対して使われた水晶はサッカーボール並の大きさがあった。誰がどう見ても、拳骨以上の大きさだというのは理解出来ると思う。

その水晶の許容量を超える魔力を保持している、ということは…… そう、つまり確実に俺は“異端”なのである。

「さらに解り易く説明してやるつ。

十進法は分かるかい？……それなら話は早い。

種族問わずで普通のやつが100、魔術師が1000、一流の魔術師が5000。

そして、フェルティナ王国の最終兵器である“フェルティナ魔導師団”的規格外の隊長様が50万。

魔術で換算するなら、初級魔術が10、中級魔術が100、上級魔術が1000、古代呪文アンシントスペルが10万。

そして、お前さんの正確な量は判らないが、確実に言えるのは水晶の許容量である5千万は超えてるってことだ

そう、5千万くらいが俺の魔力量らしい。数が多くてピンと来ない……。

話を聞く限りでは、一流の魔術師が1万人集まつたくらいの魔力量のようだ。

これは最早、戦力強化とか言う次元の話じゃない。

元の世界基準で考えるなら、どうやら俺は核爆弾を手に入れたのと同じような状況に陥つたらしい。

「記憶喪失なら得意魔術も知らないんだ？」

俺の返事を聞くこともなく、老婆は再び店の奥へと姿を消す。少々といつよりかなり頭が混乱しているようで、記憶喪失とかそんなことも言つたなあ、くらいにしか考えられない。さすがに元々学生の身分である俺に『あなたは核兵器を所持しています』ということを言われても対処に困る。しかも、それが質の悪い冗談ではなく本当のことなのだが、尚更質が悪いと言わざるを得ない。

「今度はこの水晶に手を乗せな」

いつの間にやら店の奥から老婆は戻つてきていたようで、俺の目の前には最初と同じくらいの大きさの水晶が置かれていた。

正直、これ以上に何か問題が発生しても嫌なので、水晶に手を乗せたくない。

だが、無料でやつてもらつている以上は老婆の言つことには逆らえ

ない。

なので、渋々といつ雰囲気をわざと疎しながら水晶の上に手を乗せた。

わざと同様にこちらから見て、水晶に何か変化が起きたところはない。

しかし、老婆には何か別の反応が見えていたようで、水晶をじっくりと凝視してくる。

さうには、何度も何度も水晶を見て楽しそうに頷いている。

「ほほり、お前さんは本当に楽しけえ。

得意な属性は“無”だ」

俺の得意属性は“無”とこいつです。

「得意属性が無いんですか？」

これで実はこの水晶では計れないような不思議な属性とかなったら、俺は本気で身の安全を心配する。

そんなことになれば、実験の研究対象や戦争の兵器をれわづで身の危険を感じずにはいられない。

「いやいや、得意属性は存在する。

つと、お前さんには最初から説明してやらないといけないんだつたねえ」

そう言って老婆は魔術の属性について話し始めた。

出来れば、髪で相性が判るといつとこいで説明をして欲しかった。

まとめると、魔術とこつものにはこくつかの属性が存在する。

基本属性となるのが《火》《水》《雷》《土》《風》といつ5種類。
それとは別に希属性^{ペーシック}と呼ばれる《光》《闇》の属性がある。

得意属性^{レア}というのは術者の本質のよつなもので、術者と最も相性がいい属性のことを指している。

そして、魔術との相性^{レア}といつものは魔術を行使した場合の威力や性能に大きく関わってくる。

得意属性ならば、少量の魔力でも威力や性能が高い魔術を行使することが可能であるが、逆に得意魔術でないと威力が低い上に、相性が悪ければ行使すらままならない。

「それで“無”といつのは？」

「魔術の中にはね、属性に上手く分類できない魔術も数多存在しているのさ。
そう言つた魔術の属性を無属性魔術^{レア}といつことで分類を行つているんだよ。

例を挙げるなら身体強化や治癒魔術、つて言つても記憶喪失だから判らないだろうけどね」「

良かつた、一先ずは特に問題が無いようである。

いや、魔力量が常人の50万倍ある時点でかなりの問題なのだが、それでも問題が増えないだけありがたかった。

「それにしても、得意属性が“無”なんて聞いたこともないけどねえ」

……老婆は意地の悪い笑みで俺に告げてきた。

これはあれだな、きっと神様の嫌がらせか何かなのだろう。

普段、俺が神様を全く信仰していないのに、修行中には生きて帰

れますように、と勝手に祈つてゐるのが原因なのだろう。

「見事に化け物と言つても過言ではない性能だよ、お前さんは」

老婆の言葉に急速に頭が冷静になつていいくのが感じられる。

そうか、元々化け物である俺が普通の人間になつて大切な人を作り出した時点で、それは神罰ものなのだ。

なんだ、簡単なことじやないか。

俺は単に化け物で、今までこれからもただそれだけの存在なのだ。

「そつか、そりですよね」

その事実に思わず苦笑してしまつ。

どうやら俺の願いである大切な人を作るといつことが叶つことには決してないようだ。

「うん？」

何を納得しらかは知らないけど、お前さんに助言をしておいてやるつ。

あまり目立たたくないのなら、お前さんの強力な魔力は使わない方がいい

「あれ？ どうして目立たないと分かつたんです？」

「この女性には俺が目立たたくないといつことを一言も告げていな
いはずなのだが、どうして分かつたのだろうか。

多少の驚愕もあつたが、どちらかと言えば警戒心の方が強い。

「顔が見えないほどに深くローブを被つていれば、嫌でも分かると

「いつものね」

「ああ、ローブを着ているのは当然だとして、今度はフードのことを忘れていた。」

「俺はそのことを思い出すとフードを取つた。
さすがに助言までしてくれた方に、顔すらも見せずに去つていく
ところのは失礼になるし、何より俺のちっぽけな良心が許さない。」

「すみません、失礼しました。」

「俺は……タツヤ・カンバヤシです」

「おやおや、これは『丁寧』に。」

「ワシの名は『ディエスター』。しがない占い師を」

老婆　　ディエスターさんはそんな俺の態度が気に入つたのはか分からないが、優しそうな穏和な笑みを浮べる。

こんな笑みを浮べている方にこれ以上何かお願いするところのは気が引けるのだが、俺の人生が掛つてゐるためにここで引くことは出来ない。

「無理を承知でお願い申し上げます。」

「どうか俺に魔術を教えて頂けないでしようか？」

右膝を地面に付け、胸の前で右手で拳を作り左手でそれを包み込むようにして、頭を垂れてお願いする。

このやり方は爺さんに教わった。

「何でも何か教えを請うときには、いつこう風な申し出をするらし
い。」

「……ふむ、駄目だね」

予想通りといふか何といふか、俺の申し出は却下された。

無論、これは俺の勝手な思いつきで勝手に言つていいのだから、
「ディエスタさん」が俺の申し出を却下するのは当然だ。

そもそも、弟子を取るといふのはかなり危険なことである。

武術に例えるなら、その弟子が確実に流派の根本を理解するかも
分からぬし、理解出来たとしてもそれを体現できるだけの能力が
あるかも分からぬ。

そのため、多くの流派は弟子を少しばかり多めに取り、その中で
才のある者を流派の跡取りとさせる。

もし、才があるものが間違つた風に流派を理解したなら、そこか
らその流派狂い始めるだろ。

なので、こんな急に申し出でも許可をしないのは普通のことであ
り、俺が「ディエスタさん」に何か言つのはお門違いもなのだ。

「まずは本を貸すから、それを読んでからもつ一度来るんだよ」

ふむ、俺は「ディエスタさん」に才があるのかどうか試されるようだ。
これは僕倖まわと言つてい。

まさか才を試されるだけの機会を貰えるとは、夢にも思わなかつ
たのだ。

と、気付けば田の前に「ディエスタさん」が持つて來たであろう本が
麻袋の中で山積みにされていた。

「取り柄くわいじはずはこのへりことを」

もの凄い量の本だ。

確かにそれも驚くことなのだが、残念ながら俺が驚いたのは全く
別のことであった。

【超簡単魔術書】初心者の君もすぐ「使えるよ」になる…?】

【初めての魔術 初級編】

【初心者でも大丈夫！魔術習得！】

【失敗しない魔術の学び方】

いや、この際本の題名が如何にも売れなさそうな雰囲気を醸し出していることには触れまい。

それよりも重要なのはどうして題名が読めるのか、どういったことがある。

「ディエスターさん、あの」

「この本に関する質問は一切受け付けないよ」

む、先手を打たれてしまった。

しかしながら、これも嬉しい誤算と言えるかもしれない。

もう少し時間が掛るということを見越していたのだが、予想以上に早く元の世界に関する色々な手がかりを得ている。

順調に行けば、1年以内に元の世界に帰ることが出来るかもしれない。

「分かりました。

では、この本を読んでからもつ一度訪ねることにしますか」

「気をつけて帰りなよ」

「はい、貴方たちもお体にお気をつけください」

俺はそれだけを言つと、麻袋を抱えて店から出た。

道を聞けばよかつたと思ったのは、帰り道が分からずに再び好奇

心の含まれた視線を一身に浴びながら貧民街を歩いている時だった。

「ディエスター

「師匠、 行きましたか？」

店の奥からワシの弟子である青年 カトラス が出てくる。
そつちを振り向くこともなく、ワシは目の前に置いてある水晶を
手で撫で続ける。

同時に、先ほどの青年 タツヤ・カンバヤシについて考えを巡
らせる。

「カトラス、お前さんは気配を悟られるような真似はしないだろ
うね？」

これはあくまで確認のための質問。

先ほどまでのことと思い返してみても、カトラスの気配はほぼ完
璧といいうくらいに消えていたとワシも思つや。
なぜ、カトラスが気配を隠してたのかと言つと、大抵の者は他の
種族のことをあまり良くは思はない。

フェルティナ王国は他の国と比べて奴隸や種族間の争いなどは随
分とマシではあるが、全く無いというわけではない。

そこで一応カトラスには気配を消してもらつてたのや。

カトラスは森人なので、気配を消すことに関しては他の種族の追
隨を許さないほどである。

「いや、カトラスじゃなくてイオルガです。
まあ、そんなことはしてないと思いますけど、もしかして何か失敗しましたか？」

「む、イオルガだったか。

いかんな、最近は物忘れが激しくなつてきているようだね。

だとすると、最後のカンバヤシの言葉は到底腑に落ちないねえ。

「お前さんは1人を相手に『貴方たち』なんて言葉を使うかい？」

「いえ、まさか使うわけがありませんよ。
でも、それがどうかしたんですか？」

返事を聞く限りでは、最近の若い者の流行とかそいつた類のものでもないらしい。

だとすると、結論は一つしかない。

「シフリナよ、先ほどの者は大物になるやもしれん」

「違います、イオルガです。

というか、その興味のある人物の名前しか覚えない癖はどうにかしてください。

でないと、僕は泣きそうです……」

タツヤの将来が楽しみじゃな。

ワシは知らず知らずのうちに笑い出してしまつ。

こういうことがあるから、長生きといつのは本当に楽しい。

「はあ、それより王宮からの出張の依頼状が届いてますよ」

王國からの依頼とあってせせらがに無下にゆるよつむことせせら
ないね。

ワシはイオルガに言つてすぐに準備を始める。
その間にもタツヤ・カンバヤシのことを思い出して、笑みがこぼ
れてしまひ。

これほど楽しいことなど、何十年ぶりだらうか。

「さて、王國に向かひとせらる」

第9話 所詮、化け物。されど、化け物。（後書き）

作「無謀な連投を決行してしまった」

龍「もう少し計画的に行動したほうがいいのでは？」

作「俺って計画って言葉が一番苦手なんだ……」

龍「……強く、生きろ」

作「予想外の励まし！？」

誤字・脱字の報告お願い致します。

第一〇話 おのれの世の中 “お金”だといひだす。（前編）

実のところ、感想があつますといつ表示を見ると心臓がばくばくです。

主に『ああ……批判的なこと書かれてるかなあ……』といつ感じで。つまり、作者はガラスのハートです！

それと旧版だと現在は4話に当たります……つて遅つ！？

7/13 修正……何だか投稿日に修正が多い気が。

第一〇話 世の中がひどい “お金”だとついじる。

「ちょっと、いいですかい？」

ディエスターさんから魔術の説明を受けて店を出た後に、帰り道が分からずに再び貧民街にまで来たのはいいとしよう。いや、正直なことを言えば、店を出る前にディエスターさんにどうちの方向に行けばいいのかを聞かなかつたことを後悔している。どうしても、結果的に毎前までにメリリアさん家に本を置ければそれでいいので、あまり問題があることでもない。

……面倒ではあるが。

別に好奇の視線に晒されたり、衛生環境が悪くゴミなどが放置してある貧民街を歩くのもそこまで大きな問題ではない。

ただ、見知らぬ男に声をかけられるのは頂けなかつた。

「……」

特に返事も警戒も怯えもせず、単に振り返る。

声を掛けたのは、貧民街に似付かわしくない普通の服装をしている中年の男。

茶色の髪に黄土のよじつな瞳をしていて、蛇を連想させるような顔つきだつた。

「ちょっとお薦めしたい商品があつやして」

男はそつと、男の後方に位置している大きな荷車の方をちらりと見る。

荷車は布らしきもので覆われており、中にどうこつた商品が入つ

ているのかは確認することが出来ない。

それでも、間違いなく言えることがある。

「この商品は正式な方法で売りさばく」ことが出来ず、それでも確實に需要があるようなモノだ。

「ホントは信用がある御方にしか売らないんですけど、お兄さんは特別ですよ」

男はニヤリと効果音が付きそつなくらいに口の両端をつり上げる。表情を見ているだけで、昔見た思い出したくもない光景が脳裏に浮かんでくる。

俺の家族が事故した後に次第に増えていく親戚達が時折、俺に見せる欲望の表情。

……
と言つても、今ではさほど氣にするような思い出でもないのだが

しかし、その親戚のせいで自分より年上の人には多少なりとも嫌悪感を感じるのもまた事実だ。

今になって考えると、メリリアさんに対するは他の人に對してよりも嫌悪感があまりなかつた。
どうしたことだらうか。

「説明するよりも見た方が早いんで、ここから見てみてください」

荷台を覆つている布の隙間を指しながら男が言つ。

あまり、というかかなり気が乗らないが、この手の商売人はほとんど引くことがないので途中までは言われたようにして、最後の最後で金がない旨を伝えよう。

まあ、ちょっとした嫌がらせだ。

男のせいでも多少なりとも嫌な過去を思い出させられて機嫌が良かつたのに一気に不機嫌にさせられたのだ。

少しばかりのハツ当たりは許されて然るべきだ。

取り合えず、男にハツ当たりしてもそれは自分のせいではない、
という大義名分が出来たので隙間から商品を見るににする。
しかし、大義名分が有ろうが無からうがさして変わらないので、
その大義名分はかなり無意味ではある。

荷台の中には布が薄いためか太陽（？）の光が溢れていって、暗くて見えないという事態は発生しなかつた。

そして、荷台の奥に商品が体育座りをしているのが見て取れた。
上部には白ではなく銀色の糸が綺麗に光を反射し、そこから少し
下を見れば上部と同様に銀色で円形の宝石があつた。
宝石からさらに下に目を移すと、雪のように白く細い部分に真っ
赤な首輪が何とも言えない対比を生み出していた。

「言つまでもなく、これは奴隸しょりである。

「どうですかい？なかなかに上物だと思いやせんか？

まだこれが幼いころに俺が買い取りやして、今まで手塩にかけて
育てて来たんですよ。

まあ、見ての通りハーフではあるんですが、その分未使用ですし
少しばかり値段を安くするんどうじょう？」

それにもしても奴隸を見てもあまり感じるところがないことを悲し
むべきか、それとも奴隸を買った場合の利益と損失を考えている冷
静さを喜ぶべきか。

まあ、損失というか問題点を挙げよう。

まずは購入費や維持費と言つた金銭的なもの。

次に奴隸を買ったことによりあまり良い評価を受けないとこりこ
と。

最後に国で大っぴらに禁止している行為を行うところ。

次は利点を挙げよう。

まずはこっちで自由に使える手札や駒が増える。

……いやまあ、これだけの利点でも喉から手が出るほどに欲しい。今の段階で元の世界に帰るにしてもこっちに残るにしても圧倒的に情報が足りない。

情報収集というのは1人ではどうしても限界があるし、軍人だと思われるメリリアさんに協力を仰ぐわけにもいかない。

仮にメリリアさん個人で俺に協力をしようとしても、必ず職務が邪魔をして俺に協力をすることは出来ないからだ。

他に戦力的な意味合いもあるし、文字が読めないので少しでも読めるのならそれにも役立つ。

「いらっしゃるですか？」

「最初は銀貨6枚と思つてたんですが、お兄さんは初めて『ご利用していただく御方ですので、銀貨4枚にいたしやしょう』

「つーむ、銀貨4枚か……。

金の単位と価値が分からぬからどうしようもないな。

と言つても、金貨でなく銀貨なのでそこまで高額であからさまに金をむしり取るうとしているわけではないと思つ。

しかし、今は持ち合わせがない。

「購入したいですが、今は持ち合わせがありません。

なので、元の金額である銀貨6枚で構いませんので少しの日数だけ時間が欲しいのですが？」

「あつしは明後日の早朝にここを発とうと思つてやすんで、明日の夕方にもう一度ここでどうでしょ？」「うー。

明日までに銀貨6枚というのがどれだけの労働になるのかは不明だが、時間を貰えただけありがたいと思つ」とこじみつ。

「それで構いません」

それにしても、いつもならこんな行き当たりばったりなことなどしないのだが、どうしても心というか魂というか“何か”が訴えている気がする。

あの子は助けたい、と。

……どうしてこうも視線を集めるのだろうか。

確かに件のローブは着たままだし、ここに来るのは2回目なので見知らぬ輩として注目を集めのも仕方がない。

だからと書いて、ギルドにいるほぼ全員の視線を集めるのはおかしいと思つ。

最初に来たときのようにギルド内の時間が止まったように皆が動きを止めているわけではないが、それでもギルド内の人々の話し声は小声になりチラチラとこちらを見てくる。

ギルドに入ってきた時も給仕が案内したのだが、案内している間は何とも言えない雰囲気が俺と給仕の間に流れていた。

具体的に表現するなら『うわあー、何でこいつが来るんだよ……』

という給仕からの一方的な嫌悪の気配だった気がしないでもない。さすがにそんな対応をされると、こっちが悪いことをしたように

思えてくる。

まあ、だからと言ひてどうするわけでもないのだが。

案内された席に座ると大人しくメリリアさんを待つことにした。メリリアさんとの約束は昼頃なのだが、“昼”というのが元の世界と同じように、太陽（？）が真正に昇った時で間違いはなかつたようなので少し安心した。

することもないのに、大まかにここに至る経緯を思い返してみると、男と分かれた後に貧民街を出て適当に歩いていると、大通りのような場所に出た。

すると、偶然にもそこで荷物を抱えて歩いているクラシスさんに出会つた。

話を聞くと昼食の買い出しに出ていたりしく、市場の方にまで足を運んでいたようだ。

俺としては道案内的な意味でも昼食的な意味でも助かつたので、非常にクラシスさんに感謝したのは言つまでもない。

メリリアさん家に着いた後は、ディエスターさんから貸してもらつた本を部屋に置き、クラシスさんの手製の料理をメチルさんを含めた3人でいただいた。

ちなみにメチルさんは現在仕事はしておらず、趣味としてあの広い庭で自家栽培を行つているらしい。

昼食後はクラシスさんに丁寧にギルドまでの道を教えていただきて、何とかここまでたどり着けた。

……着くまでに3回ほど見知らぬ方に道を尋ねたが。

にしても、もう少し来る時間を遅らせてきてもよかつたかもしない。

いや、だからと言つて他人を待たせるのを良しとするのかと聞かれれば、人間関係を保つ観点から考えて好ましくないと言える。……もしかして日本ではないので、意外と時間に対して寛容だつ

たりするのだろうか。

だとしても、今更な仮定で考えるだけ無駄だし虚しくなるので、
気にしないようにしようと思う。

不意に、ギルド内の音が消える。

さっきまで俺を見ていた人達も、小声で会話をしていた人達も、
俺に何の興味を示さなかつた人達までも静止していた。

全員が同じ方向を見ているが、その視線の先には俺の方向ではなく
別の場所へと向けられていた。

俺の方から見て左斜め前方になるギルドの入口。

そこに立ちギルド内の強者たちよりも圧倒的な存在感を放つ存在。
最初の時は、俺はその人物の後方に位置していたためにその迫力

に気づけなかつたのだろう。

その後は、特に戦闘をするような状況もなかつたので力を抜いて
いたのだろう。

そしてこの時になつて初めて俺はその人物 メリリアさんの本
当の姿を知ることが出来たのだと思う。

王家直属【フェルティナ魔導師団】所属、メリリア・リ
ス・コーティス。

太陽に輝く白銀のローブを風になびかせて佇むその姿は、間違
なく冒険者であり軍人であり戦闘者であり、なにより絶対強者と呼
ぶに相応しい風格を備えていた。

俺を含むギルド内にいる誰もが声を発することすら出来ない。

まるで声を発すれば、その瞬間にこの圧倒的な存在に呑まれてしま
うかのように、全員がただ自分という存在を保つだけ。

たつた1人の天族によりギルド内は何とも異様な空間となり果て
た。

「あ、タツヤさん」

メリリアさんが声を発すことにより、ギルド内の時間が再び動き始める。

「ここまで空気を支配出来る人物に会つのは、俺の人生でも数えられるくらいにしかない。

おそらくメリリアさんは軍事といつた荒事だけでなく、政治的なことも経験しているに違いない。

でなければ、闘氣や殺氣と言つたものだけで、俺やここにいる猛者たちの動きを止めるなど出来ることではない。

それにしてこのよつな人物がいる魔導師団は本気で危険だと思う。

せいぜい印を付けられなによつて既にメリリアさんに印を付けられてるような……。

「すみません、遅れてしましました」

メリリアさんが近づいて来ると、進路上にいる冒険者たちがその進路上から退けていき、その姿が海を割つたモーゼのように見えた。昨日や今朝の様子から考えればその姿は奇妙にも思えるし、出会つたときの様子を考えれば妙に納得も出来た。

「それでは、クエストに参りましょ」

言葉に従い席を立つて依頼書が掲示してある木板の方に歩いていく。

その間も周りの冒険者たちは、俺とメリリアさんに視線を送るだけでほとんど動きを見せない。

今ならその行動もよく理解出来る。

あれだけの存在感を放つことの出来るメリリアさんといきなりメリリアさんと一緒に行動している謎のローブ。

誰もが俺の正体に興味があるのだろう。

どうすればその圧倒的な強者と接点を持てるのか、と。

「どのクエストにしますか？」

私はどのクエストでも特に問題ありません

「あー、俺は文字が読めないんで指定した条件に合つ依頼を探してもうつてもいいですか？」

どのクエストでもいいとは言つが、俺も指示されたことをするだけなのでハッキリ言つてどの依頼でも構わない。

ただ、今は出来るだけ短時間で多くの金を稼げるような依頼をしたい。

「そうでしたね。

では、一体どのような条件を？」

「明日の夕方までに終わり、尚かつ銀貨12枚以上をお願いします

俺がいるのは銀貨6枚なのだが、メリリアさんに同伴してもうつなら報酬は半分くらいになるだろう。

ならば、倍以上の報酬の依頼をするしかない。

しかし、未だに銀貨の価値が分からないので、自分がかなり無茶を言つているのではないかと、少し不安になる、

「銀貨12枚……。

明日までにそれだけ必要なのですか？」

「ええ、ちよつとした事情がありまして」

あまり詮索はされたくない。

正直に『奴隸を買うために必要です』なんて王家直属の方に答えるやつはいないと思つ。

そんな行動はどう考えても国家とメリリアさんにケンカを売つているようなものだ。

なので、出来れば誤魔化したい。

「そうですか。

そうなると、少々難易度が高いクエストになりますね」

メリリアさんはそれだけを言つと、すぐに木板の依頼書を順番に見ていく。

うーむ、いつも聞かないと実はメリリアさんに裏がありました、という展開になりそうで怖い。

だからと書いて、メリリアさんを詮索しようつとすればやぶ蛇になりそうなので、これからメリリアさんを探るのは遠慮したい。

「いのクエストなら問題ないでしょ」

メリリアさんは少しうまつり言って一枚の依頼書を手に取つた。

第一〇話 金の世の話 ひまわり “お金”だとひまわり。（後編）

作「質問」一なー

龍「……」

作「り、リアクションを！

さて、感想の方に『セリフの改行はいらないのでは？』といつ
『意見がございましたので読者様に質問をしたいと思ひます。

セリフでの改行は必要でしょうか？

「」意見、お待ちしております

龍「碌に物事を決められないな」

作「いやあ、優柔不断とは誰にも負けない自信がありますー！」

龍「……哀れな

誤字・脱字の報告をお願い致します。

第11話 火山の形は、溶岩の粘り氣次第で決まる。（前書き）

戦闘描写が書けな————！

と、思っていたんですが、よくよく考えてみると第三章に入らない
とちゃんとした戦闘描写がないっていつ……

7/18 修正

第11話 火山の形は、溶岩の粘り氣次第で決まる。

左右の景色が一瞬だけ見えたかと思つたら、次の瞬間には後方へと消えていく。

最初の方は森が続いたために緑色だった景色が、今では枯れた木の灰色になっている。

地面は黄土色だったものが石や岩によつて、空は突き抜けるように透き通つた青から立ち上る噴煙によつて、生命の息吹を感じさせないような灰色に変えられていた。

幸いにも風がこちらには吹いていなかつたので、上空から灰が降つてくることはない。

現在、俺とメリリアさんはメリリアさんが操る駿馬に乗つて依頼場所に向かつている。

噴煙、という言葉から分かると思うが、今は活火山の近くにあたる場所にいる。

そう、今回の というか、初めての 依頼は“^ヴこの火山地帯”^{*} であるらしい。

ちなみに依頼に関することはヴェーネですること以外、何も知らない。

出発する前に依頼状を確認したが、字が読めなかつたので仕方ないと思つ。

「依頼はどんな依頼を受けたんですか？」

「討伐のクエストです。
ターゲットは中級竜種の『火炎竜』 1頭になります。」

“ Flame ”つまりは“ 炎 ”。

名前からは、そのドラゴンが火に対して耐性を持っているか、もしくはこちらの世界にある魔術というもので火を操る能力を持つているかのどちらかだらうとは推測できる。

しかし、ドラゴンの名前今まで英語が使用されているのか。それと、火に関するドラゴンのはどうでもいいが、中級というはどうなのだろうか。

元の世界と同じかどうかは分からぬが、同じならドラゴンというのが簡単に倒せたりするような生半可な存在でないことくらいは、対峙したことのない俺にも分かる。

そんな存在の下級ではなく中級。

普通に考えて昨日ギルドに登録したような若造にさせたる依頼ではない。

そう、最初は俺にだつてこの依頼は受けることが不可能だつた。依頼は、設定してある階級に対しても自分の階級がそれ以上でないと受けられない。

実際、この中級のドラゴンを討伐する依頼の階級はA+だつたので、俺は依頼状を受付のところに持つて行つたときに受付嬢から依頼に参加できない旨を伝えられた。

しかし、そんな根本的な失敗を犯すようなメリリアさんでは無かつた。

どのような手品を使つたかは分からなかつたが、メリリアさんが受付嬢と少し話した後に受付嬢は奥から数枚の束になつた書類を持って來た。

メリリアさんがその書類に何かを書き込んだかと思うと、依頼に参加可能になつていた。正直、どういうことなのか俺には全く分からなかつた。

それでも俺がこの依頼に参加可能だという結果だけは理解出来た。

しばらく走つていたが、段々と馬の速度が落ちてきているのに気が

がついた。

最初は馬が疲弊してきているのかとも思つたが、その割には操つてゐるメリリアさんが慌てたり思案してこるよつた素振りを見せてはいない。

次にメリリアさんは自身に何かあつたのかとも思つたが、見た限りでは特に問題ない。

「速度が落ちてきるんですけど、どうかしたんですか？」

「火山に近づいてきたので、そろそろ馬での走行が難しくなります。また、火山には馬に怯えないような魔獸もいるので元より馬で走ることが出来ません。

なので、速度を落として馬を置く場所を探しながら走つてこるので、

です」

「一む、やはつ」の2回を超えるやはつは馬といつ認識で相違ないようだ。

そして、この馬はその丈夫そうな見た目から推測できるよつて、他のある程度の魔獸達を怯えさせるほどには強いらしい。すうじいな。

「いいから歩いて進みます」

馬が完全に動きを止めたかと思つたら、メリリアさんが馬から降りた。

辺りは岩が乱立し所々に枯れた木が生えているが、広場のよつてなつていてこないう馬を置いておぐのに丁度良いと判断したのだろう。

メリリアさんの言葉に従い馬上から地面に降り立つ。

そして、メリリアさんは馬を枯れ木の側まで連れて行くと、繩を

その木に結びつけた。

いや、そんな枯れ木に結びつけても、その馬なら木を折つて逃げることが可能だと思う。

「 風檻 」

メリリアさんが右手を前に出して言葉を呟えると、メリリアさんの右手の人差し指にある藍色の宝石が一瞬だけ緑色の光を辺りに放つた。

別に視界に影響するほどの輝きでもない。

最初は何をしたのかと思ったが、その疑問もすぐに解決された。肌で感じる風の流れに変化が見られたのだ。

暴風のように激しい風が吹いているわけでも涼しいと思つほどに風が吹いているわけでもないのだが、それでも風の流れは明らかに変わつっていた。

正直、この感覚は空を見て雨が降りそり、という直感的なものに近いため説明出来ない。

その流れを追つていいくと、原因と思われる場所が分かつた。

原因は馬の周りに展開している透明の壁。

勿論、透明の壁である以上は自身が直接田にすることなど出来ないのだが、それでもそこに壁といつものがあると言えるのには理由がある。

飛んでいる枯れ葉のようなものが、馬に対し一定の距離になると微塵切りされるのだ。

いや、微塵切りという表現はあまり正しくない。

一瞬で田に見えなくなるほどに細かく出来る微塵切りなどあるわけがない。

すでにメリリアさんは火山の方に歩いて行っている。

ここの場に残りっぱなしになるわけにもいかないので、すぐにメリリアさんを追う。

と、俺が一歩踏み出すと火山の方から複数の気配がやつてくるのが分かつた。

反射的に腰のところにある刀の柄に手を置く。

「どうかしまし ツ」

俺の行動に一瞬だけ訝しげな表情をしたメリリアさんも火山の方からやって来ている気配に気付いたのか、すぐに火山の方を向き戦闘態勢に入る。

しばらくもしないうちに、その気配の正体が分かつた。

最初に目に付くのは、普通は考えられないような異様に赤い肌。次に顔面に付いている左右二対の大きな眼。

そして、最後に筋肉隆々の腕に持っている人の大きさほどもありそうな棍棒。

現れたのは人型でありながら、どう見ても人間ではない3mを超える5頭の怪物だった。

「あれは……『バーバス』？」

「ばーばす？」

メリリアさんが漏らした“ばーばす”という聞き慣れない語に反射的に聞き返す。

「『バーバス』は人型の魔獣です。」

あまり知能は高くないので強い相手ではないのですが、肌が鉱石のようないいに硬いために斬撃などをほどんど受け付けず、前衛には厄介な相手です」

「ひづらに向くこともせずにメリリアさんは淀みなく答える。
肌が鉱石並に硬いとか、生物としてどうなんだろうか。

「それなら魔術でどうにか出来ないんですか？」

魔術なら《火》《雷》とか属性があるくらいなので、魔術を使って《バーバス》を焼くなり雷撃を飛ばすなりすればいいのではないかのだろうか。

「いえ、タツヤさんに相手をして貰いたかったのですが、今回は相性が悪いですね」

「あ、それならこきますよ」

メリリアさんの返事を聞く前に最も奥に居る《バーバス》に向かって地面を蹴つた。

すると、俺の思考は自然に戦闘時のそれに切り替わつていった。

メリリアが言つていたように《バーバス》の肌は鉱石並に硬い。
それこそ冒険者用に鍛えられた刃物でも、名のある鍛冶職人が鍛えた物でなければ刃こぼれをして、再び使うことが不可能になるほどにだ。

なので、大抵は刃物などを使って挑むようなことをせずに遠方から魔術を以て倒す。

『バーバス』は魔術に対してほとんど抵抗力を持っていないので簡単に倒せるのだ。

しかし、当然ながら龍哉は未だに魔術を行使することは出来ない。そして、龍哉が所持している武器は鞘に収められている三振りの刀のみ。

そう、つまりはただ、それだけのことだった。

一瞬にして《バー・バス》の木の幹のように太い右腕が宙を舞う。痛覚のみで叫び声を上げた《バー・バス》が自身の腕が宙を舞つているのを認識する前に、《バー・バス》の右膝から下の部分が本体から切り離されていた。

右足の支えを失つたことで『バーバス』は地面に崩れ落ちる。右腕も切断されているので、地面に手をついて支える」とすら出来ない。

そして、地面に倒れた衝撃で皮が伸びきつた首筋に容赦のない一撃が振り下ろされた。

『バーバス』が倒されたことに他の『バーバス』達は気付かない。正確に言うのなら、『バーバス』が倒れたこと自体は認識を出来ているのだが、どうして『バーバス』が倒れたのか理由は分かつてない。

しかし、今の『バー・バス』達にはあまり関係がないことだった。

今の《バーバス》達の頭の中にあるのは食欲だけなのだ。
龍哉達の目標である《火炎竜》などの竜種は希にしかこの大陸に
ターゲット フレイムドラゴン

現れない。

通常は大陸の側にある島々のどこかに生息をしている。それが何らかの理由で島の動物の数が減つてしまつと、大陸にやつてくるのだ。

目的は捕食。

そのため、『バーバス』などの肉食の魔獸は『火炎竜』フレイムドラゴンに自分たちがいつも食している得物を横取りされてしまうので、自然と捕食出来る数が減つてくる。

なので、今の『バーバス』には目の前の龍哉達のことしか頭にないのだ。

4頭のうち、龍哉に近かつた2頭が一斉に棍棒を振り上げて左右から龍哉に迫る。

射程に入った瞬間に棍棒を振り下ろそうとして、2頭の『バーバス』の動きが止まる。

両方の『バーバス』の眼に刀が刺さっていたのだ。

片方の『バーバス』には一振りの刀が4つある眼の右上と左下に刺さつており、もう一方では龍哉が左下の眼に刀を思いつきり刺している。

三振りの刀はいずれも『バーバス』の眼球だけでなく、後頭部にまで貫通していた。

どうやら刀は双方の『バーバス』の脳に傷を負わせたらしく、2頭とも崩れ落ちた。

その時点では、残り2頭の『バーバス』は初めて目の前の龍哉に警戒を覚える。

しかし、龍哉に対して警戒を覚えるのがあまりにも遅すぎた。

龍哉を注視していた『バーバス』だったが、気付けばその姿を見失っていた。

4つの眼を別々の方向へと動かし、必死にその姿を探す。

この時になつて初めて《バー・バス》は龍哉ではなく、龍哉えものだつたのだと、あまりにも遅すぎた危機感を覚えたのだ。

そして、《バー・バス》は聴覚にナニカが地面に落ちるよつた音が聞こえた。

《バー・バス》がその方向を向くと、向かつてくる赤い影。

《バー・バス》が最期に見たのは、日の光を反射する細長く美しいものだった。

こうして、5頭の哀れな《バー・バス》達は肉塊へと姿を変えた。

第1-1話 火山の形は、溶岩の粘り氣次第で決まる。（後書き）

作「質問」——なー」

龍「前書きは、どいつ」とだ?」

作「ああ、あれですか。

理由は簡単です。

単に主人公が強すぎて、普通のやつじゃ相手にならないんだ。
だから、戦闘描写とこいつは躊躇描写とかになるかも」

龍「なるほど」

作「納得するんだ!?」

誤字・脱字の報告よろしくお願い致します。

やうと……やうと書かねした！

8 / 2 後書き追加

第1-2話 ただ擬態と言つても色々な部類がある。

5頭目の《バーバス》が地面に崩れ落ちる。そのことを確認すると、段々と思考が元に戻ってきた。

「ふう」

刀を鞘へと戻し、《バーバス》に刺さりっぱなしの刀も回収をする。

三振りとも刃こぼれなどは見られないでの、今後の戦闘にも支障はないだろう。

一振りくらい使い物にならないことを覚悟してたんだが。にしても、こんなに体が動けたのは驚いた。

どう考へても、元の世界にいたときの身体能力なんて比じやない。

「これで大丈夫ですか？」

メリリアさんの方を向いて問う。

しかし、返事は返つてこずくにメリリアさんの驚愕に染まつた表情だけがあつた。

む、何か失敗をしただろうか。

「何か失敗しましたか？」

「あ、いいえ。

どうして《バーバス》を斬ることが出来たのかと思いまして」

ああ、なるほど。

メリリアさんの話を聞く限りでは前衛に《バーバス》の相手は敵

しごらしがらな。

おそらくは武器の目的の違いだらうと思つ。

「『バーバス』は人型だったので、人体でも皮膚が薄いところを狙つたんです。

それに剣とは違つた刀なので、斬ることが出来たんだと思ひますよ」

まあ、俺の身体能力が上がつていたことも要因ではあるだらうが。刀に関しては日本が特別だつたと思う。

歐米では大剣などの質量がある武器を用いて敵の甲冑^{こう}と叩き潰すのに対して、日本では刀といつ切れ味のある武器を用いて鎧の隙間から敵を斬るのだ。

ギルドの冒険者たちの装備を見たところだと、敵を観察して弱点を正確に狙つてから攻撃を加えるという考えはあまりないように感じられた。

おそらく魔術といつ便利なものがあるためだらう。

「なるほど、刀ですか……」

メリリアさんが刀と聞いて、意味深な顔で思案に耽つている。うーむ、これは失敗したかもしねない。

今の俺は記憶喪失といつ設定なのに刀といつ特殊な武器を扱い、
剩^{あまつさ}え ギルドの冒険者を見る限りでは、俺の戦闘能力はかなり上位に位置するものだ。

そんな男を疑うな、といつ方が無理があるのでないだらうか。刀に関して話したのは早計だつた。

こつちの世界に存在しているのかすら分かつていないので。

まだ『バーバス』を倒した段階だつたら、何とでも言い訳を出来たのに。

「それでは、先に進みましょうか」

無反応、ときたか。

それなら刀は珍しくない武器なのかと言えば、そうではないだろう。

でなければ、メリリアさんが質問する意味が分からない。

怪しいが、この場では故意に質問を避けている？

この場には俺とメリリアさんしかいないので、俺の実力が正確に分かつていな以上は下手に俺との争いを起こして、逃げられるわけにはいかない。

なので、ここではなくメリリアさん　軍の準備が整った場所での尋問が目的だろう。

そう考えると、メリリアさんの反応には納得がいく。

一国間の緊張が高まっていると言つし、疑うのは仕方のないことなのだろう。

「ひづらですよ」

いや、活火山を登るってどうなんですか……。

赤や黄色といった暖色が色鮮やかに煌めいて洞窟内を明るく照らす。

そのためか、洞窟内だといふのにそれを感じさせないほどに視界を確保できていた。

しかし、その暖色がチカチカして目が辛いのは言つまでもない。

現在、俺とメリリアさんは火山に出来ている洞窟のなかを歩いていた。

辺りには溶岩の河が普通に流れているし、空気の流れが悪いため洞窟内の温度は高い。

それでも、洞窟内にいられるのは偏にメリリアさんのお陰である。魔術には一定の範囲内の温度を操作するものがあるらしいので、それを使ってもらい俺とメリリアさんを基点にそれぞれ半径2mくらい温度が下がっている。

もし、この魔術がなければ間違いなく脱水症状によつて命が絶たれていたと思う。

やっぱり、応用が利いて魔術は便利なようだ。

「タツヤさん、魔獣です」

メリリアさんが前方を見ながら言つ。

しかし、同じ方向を向いても俺には魔獣の姿も見えず、気配も感じられない。

そのことに警戒を強める。

「『フリズリナ』のようですね、ここはお任せ下さー」

メリリアさんはそう言つて、前方に右手を構える。

何度も前方を確認するが、それらしき姿も気配も未だにない。

この場合に考えられるのが、魔術によって相手の姿が隠れているというじと、この世界の人間には認識出来るが俺には出来ないというじと。

前者なら魔術を習得すればどつにでも出来るが、後者ならこういう相手を感知することが出来る特定の器官が俺に備わつてないことがありえるので、どうにも出来ない。

「アイスピックス
氷箱」

宝石が水色の光を放つ。

すると、メリリアさんの進行方向にある“氷”が長方形の氷に覆われた。

最初は狙いを外したのかとも思つたが、メリリアさんに限つてそんなことはなかつた。

長方形の氷に覆われた内部で氷に出来てゐる大小様々な穴から触手のようなものが、まるで内部の空間を埋め尽くそうとしているかのように大量に出てきたのである。

なるほど、魔獸の姿を見ることも氣配を感じることも出来なかつたんじやない。

姿も氣配も認識した上で、それが魔獸のものだと判断できなかつたのだ。

俺が岩だと思い込んでいたのは、おやぢく魔獸の甲殻になるのだろ。

擬態する魔獸とは予想できなかつた。

俺のよつこ、ただの岩だと思い込んで近づいたやつを触手で捕食していくんだろ。

「《フリズリナ》は頑丈な岩で弱点である核を隠してゐるので、鎧のよつこ、甲殻である『岩石』じとたき割るよつな重量武器でなければ前衛の攻撃は通じません」

「甲殻のせいで核に攻撃を加えられない刀では、難しい相手ですね」

きちんと準備できれば、刀でも絶対に倒せない相手といつわけでもないようだが。

しかし、氷に閉じ込めてお終いだろ。

このままでは溶岩の熱で氷が溶けて、暴れ出しそうな気がする。

今でも内部から氷をたたき割りうつとしているのか、バチバチと触手をぶつけてゐる。

どう考へてもその触手では、氷を割ることは無理だろう。というか、意外と氷が溶け出していない。

意外な方が浮いていたが、

こういった暑さの中では全く保たなさそうな印象なのだが、実際は違うのだろうか。

「圧搾」 [コンプレッション]

メリリアさんがさらに唱えると、氷に変化が現れ始めた。

氷で出来て いる 箱 が 中 に 魔 獣 を 入 れ た ま ま 高 速 で 縮 小 し て い く。

又天が岩石かの語で、いた由荒毛屋傳が、没してい

なものであるためなのか、とても透き通っていて氷の中にいる魔獣の様子が詳しく分かる。

体に変化していく。

その中でも暴れている姿には生命力の強さを感じさせるが、とても少年少女 というか成人にさえも、見せることを躊躇わせるような刺激が強い映像だ。

そして、しばらくの後、氷は掌くらいの大きさになつた。
どうやら甲殻の中はあまり詰まっていなかつたようだ。

「それで問題ありません」

メリリアさんはそう言つて、氷に近づいてそれを拾い上げる。

なければ分からぬ。

そして、その氷を溶岩の中に投げ捨てた。

「行きましょうか」

別に氷 자체はそのままにしておいても良かったのではないだろうか。

確かに、もしこの場で戦闘にでもなった場合には足元にある氷は行動を阻害して邪魔になるが、そのことを除けば氷を放置していても特に問題点はないように思える。

魔術に関しては素人の俺が出る幕でもないので、深くは考えないこととする。

「」この地理に関しては全くと言つていいいほど分からぬが、歩いた方向から鑑みると、おそらく火山の中心部に近づきながら進んでいるのだと推測できる。

溶岩の河の流れている溶岩の量が最初の頃に比べて格段に増えているし、何より洞窟の入口付近にいた魔獣も火山の中心に近いこちら一帯では姿を全く見ない。

メリリアさんの魔術のお陰で気になつていないが、周囲の熱量も段違いなのだろう。

少し前には多少なりとも姿を見せていた植物も、ここには生えていない。

「」の先に火口に続く道があります。

『火炎竜』は通常、温度が最も高い場所にいるので、火口にいると思われます」

火口つて大丈夫なのだろうか。

洞窟に入る前に山頂からすごい量の噴煙が出ているのを確認したから、生身で火口に近づいたとしたら、あまりというか全然大丈夫そうではないのだが。

「火口つて近づいても大丈夫なんですか?」

「そうですね、こここの火山は火口の溶岩が固まっているので問題ありません」

す。
いや、噴煙
火山ガス
が噴出してるなら問題ありまくりで

火山がスリに含まれているもの次第では生命活動に関わつてくる。そういうのが含まれていなかつたとしても、水蒸気が高温なので火傷は免れまい。

そんな場所に安易に近づくのは感心できるようなことではない。危険性を知らないならまだしも、俺はその危険性を十分に認識出来ている。

「噴煙が昇っているなら、安全と言えないんぢやないですか?」

「ああ、それは

メリリアさんが説明をしようとした瞬間、あたりに濃密な殺気が振りまかれる。

人間が放つような理性があつて、俗物的な願いがある殺氣などで
はない。

も純粹な殺意。

一瞬にして、俺はその殺氣を放つてゐるナーフから距離を取る。理性で危険性を感じたわけではなく、本能的な回避行動。

言つなれば、生命活動を行つてゐるものとして当たり前の行動である。

回避行動を行つた後に、腰の刀を抜刀していつでも反応できるよう警戒態勢を取る。

その時なつてやつと、メリリアさんに対する思考が割けるようになる。

周囲を探ると、前衛である俺よりも遙かに後方に位置してはいるが、完全に相手の攻撃を回避することができるような遠い距離にいるわけでもない。

だが、メリリアさんの動きを見ていると完全な後衛ではないのだう。

それならば、じゅうじが下手に言つよりも慣れている距離にいてもらつた方がいい。

俺もメリリアさんも言葉を交わすこともなく、道の前方を注視する。

未だに少しも減ることなく殺氣がこの道に満ちている。

しかし、いつまで待っていても殺氣を放っているものからじゅうじに近づいて来ない。

気配はこの道の先にある場所に留まつたままだ。

このままでは埒があかない。

メリリアさんに目配せをして、この先に進む旨を伝える。

どうやらメリリアさんも同意のようだ、頷くだけで意思疎通を完了する。

ゆっくりと、警戒を少しも緩めることなく道を進んでいく。

いつでも反応できるような体勢を崩すようなことは決してしない。そして、道の終わりに到達する。

この先には巨大な空間が広がっているようだ、気配はその真ん中に位置している。

ここから対象までの距離は100m前後あると思われる。

メリリアさんを見ると、いつでも大丈夫だとばかりに笑顔で応える。

なので、俺も下手に緊張をして失敗をしないようにする。

そして、道から飛び出した。

最初に見えたのは真っ白な霧。

いや、霧にしてはあまりにも違和感がある。

一ヵ所から上空に向かつて昇っている霧など聞いたこともない。

同時に噴煙の正体はこれだつたのかと納得する。

これなら火山ガスとは異なつたものなので、おそらく問題ないだらう。

そして、次第に立ち上つていた霧　　水蒸気が薄くなつて、その姿が現れる。

見るもの全てを圧倒するような鋭い眼光。

鉄くらいなら簡単に噛み切りそくなくらい大きな顎。

燃え上がる炎を連想させるよつた深い赤色の鱗。

その巨体を支えて大空を翔るためにはじめに発達したであろう翼。

中級竜種《火炎竜》、堂々顯現

第1-2話 ただ擬態と言つても色々な部類がある。（後書き）

作「もう書けたから満足だよ、何にも言つひとないよ」
龍「随分と疲れているな。

更新は一週間ぶりになるのか？

「じんだけ書いてないんだよ」

作「全ては夏が悪い」

龍「クーラーとか扇風機でも使えば大丈夫だろ？」

作「節電だよ、バカヤロー。」

それに節電関係なしにクーラーとか扇風機苦手だし。
点けつけばなしだとお腹が痛くなるんだ」

龍「軟弱者」

作「う、うるさい！」

龍「それと作中に出てきている刀や剣の記述に関してだが、これについては正確な情報でないことをお伝えしておく」

作「自分の曖昧な記憶から引用しているので事実とは違うやもです。
事実と違う場合は、この世界ではそういうものだと納得してください」

龍「ちやんと確認ぐらうしろよな」

作「……申し開きも」ざこません」

誤字・脱字の報告お願い致します。

第13話 滅却は700~1200 ぐら。 (前書き)

最後がやつつけになつてゐる気が……。

しかも、英語苦手なのに何で英語にしたんだか……。

だいたい、こんな戦闘にする予定はなかつたはずなんだが……。

自分の計画性の無さが泣ける。

8/3 修正 『火炎龍』のルビを消しました。

そもそも一括りに竜種^{ドラゴン}と言つても様々な種類が存在する。日本の屏風に描かれているような竜もいれば、ゲームに登場するような龍もいる。

しかし、当然ながらそれらの竜種は架空の生物である。実際に目にしたことがある人物もいなければ、化石などが発見されたわけでもない。

それでも古今東西の物語に竜種は登場する。

そして、多少の差違はあれども全てに共通している事実も存在する。

今となつてはその事実も薄れてきているが、根本的なものは変わらない。

その事実がどのようにして広まつたのか、どうして広まつたのかも分からぬが、それでもその事実だけはどの文献も変わらないものであった。

その姿は見る者全てを畏怖させ、その咆吼は聞く者全てを震わせ、その巨大な^{からだ}軀^{からだ}は近づく者全てを圧倒させ、その存在は知るモノ全てを心酔させてしまう。

邪悪な印象がある竜種も存在するし、元はそのような意図で想像された節もある。

だが、それでも竜種というものを神聖視してしまつのも、その強さ故に仕方ない。

竜種がその強さを誇るのも、その身が大自然を司るからなのかもしない。

さて、ここまで来たが言いたいことは一言だけだ。

人が^{ドラゴン}大自然に抗うことが出来るのか、といふことだ。

龍哉自身が意識することもなく、その思考は戦闘時のものへと切り替わっていた。

余計なことを考える余裕など、現在の龍哉の頭の中には存在するわけもなく、目の前の強者に^{フレイムドラゴン}対してどのような動きをすればいいのかだけを考えていた。

それとは対照的に龍哉よりも後方に位置して『火炎竜』との距離があるためなのか、メリリアの頭の中は冷静に状況とそれに対する龍哉の行動の分析し始めていた。

そして、その2人の行動を見つめたまま動こうとしない『火炎竜』。

巨大な空間内に重い沈黙が流れる。

龍哉からしてみれば、人型でない相手がどのような手段でこちらに攻撃を加えてくるのかが分からないので、こちらから下手に攻めることが出来ない。

メリリアとしては、龍哉がどういった動きをするのか少しでも多くの情報が欲しいので、自ら進んで『火炎竜』に攻撃をするような真似は決してしない。

そんな中で、2人のように難しいことを考えない『火炎竜』が動く。

巨体な躯を支えている四つの足のうち、右の前足を高く振り上げる。

そのまま、無造作にその足を地面に叩きつける。

40m以上もありそうな躯を支えている足なので、その大きさは

言つまでもない。

もし振り下ろされた下に人がいたら、簡単に潰されてしまうだろう。

しかし、『火炎竜』が振り下ろす場所には龍哉もメリリアもいない。

当たり前である。

龍哉とメリリアは少なくとも100mは距離を取っている。

いくら曰大な『火炎竜』と言えど、100m以上もある距離から前足を振り下ろすだけで、離れている相手に攻撃を加えることなど出来るわけがない。

訝しげな表情で龍哉は『火炎竜』を見るが、それで何が分かるわけでもない。

と、次の瞬間に辺りに変化が起き始める。

いや、変化などと生ぬるいモノではなく、天変地異と表現する方が正しい。

地面が揺れ、龍哉とメリリアはその場に直立することも難しい。だが、『火炎竜』にとつてこの地震は単なる副産物に過ぎなかつた。

次第に『火炎竜』を中心として地面のあちらこちらが隆起する。そこから吹き出すのは、人など容易に溶かしてしまうほどの熱量を持つ溶岩。

それらが地中から『火炎竜』によって噴出させられたのだ。

龍哉達がいるのは、溶岩が火道の途中で固まつた場所の上にあたる。

つまり、現在のところは『火炎竜』と戦闘を行うだけの足場が確保できているが、この地面の遙か下方には煮えたぎる溶岩が流れているのである。

その溶岩を十全に操るだけの能力が『火炎竜』にはあるのだ。では、仮に噴火に匹敵する大量の溶岩を火口に向かって火道に流

されたとしたら？

火道の途中にいる龍哉達がどうなるのかは言つまでもない。

「 ッ

当然、その考えは龍哉も十分に考えることが出来た。

溶岩が噴出してから龍哉がその解に至り、それに対する策を講じ始めるのとほぼ同時に、噴出されて高くまで舞い上がった無数とも言える溶岩の雨が一斉に降り注ぐ。

その雨の中に入が生きることが出来るだけの空間は存在しない。

「 氷箱 つ！！」

龍哉に溶岩が降りかかる寸前に、龍哉はメリリアによつて氷の箱に閉じ込められる。

そして、無数の雨は氷の箱に襲いかかつた。

氷と溶岩が触れ合つたらどうなるかなど、考えるまでもないだろう。

龍哉もこれで溶岩を防ぎきれるなんて、甘い考えはしていなかつた。

即座に、氷が溶けた場合はどう動くべきなのかを考え始める。

しかし、そんな龍哉の考え 常識は覆されることとなる。

氷は溶けない。

溶岩は氷の表面を滑り落ちていくだけで、全く氷を溶かしていい。

「 ウォーターボール

続いて、火口から見えている空を覆い隠すほどの巨大な水の塊が現れる。

水の塊は重力に逆らうことなく、そのまま地面に向かって落下する。

地面には《火炎竜》によつて噴出した溶岩が多く残つており、そこに大量の水が降り注がれると、一瞬にして水は空間を埋め尽くすほどの水蒸気となつてしまつ。

その水蒸気は龍哉とメリリア、さらには《火炎竜》の視界さえも覆い隠す。

「上昇氣流」 アップドライフ

そうなれば、視覚に多く頼つている人間ではまともに戦闘など出来ない。

そこでメリリアは周囲の風を上空へと送ることにより、視界を確保する。

水蒸気が晴れてから、龍哉が《火炎竜》を見るとすでに攻撃態勢に入つていた。

視界を覆われるほどの水蒸気の中では人間は行動を制限されるが、嗅覚や聴覚が人間などとはかけ離れている竜種ドラゴンにはあまり関係のないことであつた。

人を丸呑みできそうな大きな顎を開け、赤い魔法陣を展開させている。

放たれたのは、直径が人の大きさほどのある火球。

高速で放たれたそれは、一切の速度の低下を見ることなく龍哉へと飛んでいく。

火球はメリリアの氷の箱に阻まれて、龍哉の許に届きはしなかつた。

しかし、それは結果だけを見ればのことである。

火球によつて、メリリアが出現させた大量の氷は溶け出していた。残つていたのは、僅か1cmほどの程度の氷だけであつた。それを考えれば、火球は本当にギリギリで防がれたことになる。

解除 リリース ツ !

それを見てメリリアは即座に氷の箱を消す。

次に『火炎童』からあの火球が放たれれば、メリリアの氷のせい
で龍哉は回避行動を取ることが出来ずに、そのまま火球が直撃して
しまうことになるからだ。

左に飛ぶ。

へと肉薄する。

さすがの『火炎籠』と言えども、それだけの速度

の反射神経はしないよつで、全く反応をせずに龍哉が肉薄することを許してしまつた。

EE97

出来る眼。

しかし、龍哉が想像していたよりも勢いか乗ってしたので、抜刀術を発動するタイミングが絶好の瞬間から、コンマ数秒に満たないほんの僅かの時間だけ遅くなってしまう。

そうなると『火炎竜』の右眼を完全に斬れず、表面を掠めるだけと浅くなつた。

最早、声というのも巴からしげぼどの音の塊。

仮に地面を蹴つた勢いが弱く、絶好の瞬間に抜刀術を放つて『火

炎童》から距離を取れていなかつたら、確実に龍哉の鼓膜は潰され
て使い物にならなくなつていただろう。

だが、距離が取れていたとしても龍哉とメリリアの体を硬直させることは十分だった。

龍哉もメリリアも反射的に耳を押えて、一切の身動きが取れなくなる。

そして、龍哉が想定していた最悪の出来事が起つる。

先ほどとは比べものにならないほどの怒氣を孕んだ咆吼を上げる。直後に地面が強く揺れ、それに伴って地面が徐々に崩れ始める。崩れた場所から穴が広がっていき、地面が無くなるのも時間の問題である。

咄嗟に龍哉はメリリアを連れて、来た道へと引き返そうとする。しかし、『火炎竜』はそれを許さなかつた。

『火炎竜』は龍部達が来た道に到達するよりも早く火球を放ち入口の上部の壁を破壊して落ちた岩石によつて入口が完全に塞がつてしまつ。

こうなれば、龍哉達がここから脱出する手段は残されていない。そんな龍哉達に追い打ちをかけるように、地面は完全に崩れ落ち

重力に逆らう方法がない龍哉とメリリアは、落ちることしか出来なかつた。

ふと、龍哉の耳に言葉が届く。

静かだが、辺りに染み渡り神聖を感じさせるよつた声。

溶岩に向かつて落下しているのだが、龍哉は一瞬だけそれすらも忘れてしまう。

「 我、呼び起^スすは終焉の氷。

氷河期」

刹那、世界が凍つた。

龍哉達の直ぐ下には、溶岩であつたものが強制的に凍らせられていた。

それだけでなく、火道の壁である部分も全てが凍つていた。

無事なのは、宙に浮いている龍哉とメリリア、そして『火炎竜』だけだった。

「 上昇氣流」

氷にぶつかる前にメリリアは上昇氣流を発生させ、空気抵抗を無理矢理に増やすことによって速度を落とし、氷に着地するときの衝撃を軽減させる。

そして、龍哉とメリリアは危なげなく凍つた溶岩に着地する。さすがに龍哉もこれは予想外であり、多少なりとも驚きを隠すことが出来ない。

しかし、十分に驚く暇さえも龍哉には『えて貰えなかつた。

「 氷壁」

四方を柱によつて支えられた氷の分厚い板が、龍哉とメリリアの頭上に現れる。

龍哉がそのことを視認した瞬間に、氷の板に『火炎竜』が放つた

火球が直撃する。

火球によって龍哉達の視界が覆われ、一瞬だけ『火炎竜』の姿を見失う。

その一瞬の間に、『火炎竜』は急降下し龍哉達に接近する。一度とも火球が効かなかつたので、『火炎竜』は物理的な攻撃を加えようとしたのだ。

降下する勢いのまま、『火炎竜』の巨体が氷の板に激突する。その衝撃は計り知れず、火球にも問題のなかつたメリリアの氷柱に亀裂が走る。

龍哉とメリリアはすぐに氷の下から飛び出し、『火炎竜』から距離を取る。

直後に氷柱が砕けて、氷の板も凍つた溶岩に叩きつけられる。

『火炎竜』自身には傷が全くと言つていいほどなく、鱗の堅さがよく分かる。

「
アイスコフイン
氷棺
」

メリリアの神聖さを感じさせたものとは異なつた、冷たさや鋭さを感じさせる声と共に、『火炎竜』の足元を中心に地面を隠すほどに大きな水色の魔法陣が出現する。

その魔法陣に危険性を感じたのか『火炎竜』は即座に飛翔しようとしたが、メリリアの魔術は『火炎竜』を逃がすことを良しとはしなかつた。

『火炎竜』が翼を広げたかと思つたら、足から一気に凍つっていく。氷はそのまま全体まで凍らせ、気付けば巨大な氷柱となつていた。翼を広げた『火炎竜』が躍動感溢れる姿で氷漬けになつているそれは、美術作品として間違いなく一級品であるし、人工物では表現し得ない美しさがあつた。

しかし、諸行無常。

今も昔も、美しきモノにほどこの言葉は当てはまるものである。

「
破壊^{クラッショウ}
」

氷柱は細かな氷の粒となり、
『火炎竜』^{フレイムドラゴン}諸共^{もろとも}碎け散つた。

第1-3話 滅却は700~1200 ベル。（後書き）

作「なあ、何で自分はこんなに無謀なんだろつか」

龍「それはお前がお前だからだろ」

作「……哲学か何かですか」

龍「無いモノを嘆くくらいなら、あるものを活かすことを考える」

作「……何も無い、自分は？」

龍「……」

作「……」

龍「強く……生きる」

作「またそれ！？」

誤字・脱字の報告をお願い致します。

第14話 取り越し苦労の草臥れ儲け。骨折り損でも可。（前書き）

おそらく無駄な部分が多い回。

分かりにくいくらいだったので、後書きにまとめました！

8/12 後書き修正（？）

第14話 取り越し苦労の草臥れ儲け。骨折り損でも可。

目立つた外傷、四肢の異常、身体能力の低下等の問題は無し。
と言つより、掠り傷すら負つてはいない。

俺が『火炎竜』に負わせた傷は右眼の表面を薄く斬るぐらいだったの、俺自身が全くと言つていよいほどに傷を負つていなくても当たり前と言えれば当たり前である。

それに対しても、ほぼ一人で『火炎竜』を倒したメリリアさんも傷一つ無い。

無論、俺が前衛でメリリアさんは後衛なので、傷の有無だけで実力は分からぬ。

だが、それでもあれだけの人智を越えるようなものに単独で勝利出来るメリリアさんは、元の世界では想像できないくらいの実力の持ち主なのだろう。

そして、俺はそのメリリアさんと対峙^{たいじ}していた。

「急にどうしたんですか？」

「少々、伺^{うかが}いたいのですが

『火炎竜』が粉々になつた後に、メリリアさんが「魂球^{ボール}」という物を使って『火炎竜』の魂を中に閉じ込めるまではよかつたのだが、そこから段々と雰囲^{アム}気が変わってきた。

訝しく思い、近づいて声を掛けようとしたところ、メリリアさんが警戒態勢に入った。

そうすると、メリリアさんは『少し、お話をしましょうか』と笑顔で言つてきた。

そして、話はさつきの俺の質問へと繋がる。

「何でしじゅう？」

「タツヤさんが使っている刀という武器ですが、随分と珍しい武器だと思いまして」

確かに、刀に関しては俺が話しそぎた部分もあるので怪しまれても仕方ないとと思うが、そのことを2人だけといつこの状況で訊くといふのは腑に落ちない。

不審者が自爆することを考慮して街の中で訊かないことは当然としても、2人だけといつこの状況下で訊くのはあまりにも危険性が高くないだろうか。

探つてみても、俺とメリリアさん以外に周りに生命の気配はない。他の仲間が魔術で気配を消し近くに潜んでいつでも飛び出せるよう構えていた可能性もあるが、そのことを考慮に入れてもあまりにも無謀だと思う。

「そうなんですか？
よく分からないんですけど」

あくまで記憶喪失といつ設定は貫き通すべきだろ？

下手に新たな言い訳なんかして襤襤^{ボロボロ}を出したら元も子もない。刀の特性を知っていたことに関して訊かれたら、偶然にも一般常識などと一緒に知識として残っていたと言えば、医学が未発達であるこちらでは誤魔化しきれるだろう。

「はい、大変珍しいものですよ。
何と言つても、『異世界』の武器ですから。
使いにくいらしく、普及自体はあまりしていませんけど」

「そういうことか。

様々な可能性を考慮してはいたが、その可能性は考えつかなかつた。

確かにギルドで見た文字は違つたが日本語を話していることを考えれば、日本人の刀を使う誰かが以前にこの世界に来てはいたとしても可笑しい話ではない。

だが、それでは可笑しい点があるのもまた事実。

それだけでなく、メリリアさんの異世界の存在を肯定するような発言は重要だ。

もしかしたら、元の世界に帰るための手段があるかもしれない。そのことを考慮すると、俺が異世界から来たことを話して協力をしてもらいたい。

しかし、メリリアさんはあくまで国に仕えている身分であり、利益があるかも分からな上にほぼ無関係である俺という人間の提案を聞く必要性など皆無に等しい。

だからと書いて、このまま誤魔化すのにも無理がある。
なら、メリリアさん他人を信じてみるのも良いか。

もしメリリアさんが、フェルティナ王国の不利益にならない形で俺に協力してくれるのならば俺はとても嬉しいが、その為にはメリリアさんを完全に信用しなければならない。

そうしなければ、俺の情報は国に筒抜けになつて緊急時に処理されやすくなる。

まあ、いつもの俺ならば微塵も考え方がない意見だが。

「面倒くさい探り合はずつと止めて、お互に建設的な話をしませんか？」

俺はメリリアさんにそつ提案をしてみるが、笑顔でこちらを警戒したまま反応がない。

「ふう、そつちがその気ならこちにも考えがあります」

その言葉に危険性を感じたのか、幾分かメリリアさんの警戒色が強まる。

俺は態とゆうくりとした動作で腰にある三振りの刀に手を掛ける。ローブを買って貰つた時に一緒に堅めの布も買って貰い、それを角帯の代わりとしているのだが、薄い布なのに元の世界のものより刀がずれにくいので驚いている。

その角帯から三振りの刀を鞘ごと抜く。そして、三振りとも田の前の地面に置き、そこから出来るだけ後方に下がる。

「……何の真似でしようか？」

さらりに距離が広がったメリリアさんから困惑と警戒が入り交じった声が発せられる。

困惑してはいるのだが、メリリアさんの警戒はさつきよりも強くなつており、こちらには微塵の隙も見せないようにして辺りにも気を向けているようだ。

おそらく俺が突然に武器を手放したことで何か仕込んでいると思ったのだろう。

しかし、非常に残念ながらこちらには何の策もない。

完全にメリリアさんを頼りにした愚かとも言えるような行動である。

「攻撃を加える意志がないことを示そつと思つたなんですが、逆効果だつたみたいですね」

「アイスシャックル
氷枷」

俺が言い終わるかどつかの瞬間にメリリアさんは魔術を発動させ

た。

最初は回避行動を取らうとしたが、あることに気がついたのでその場に静止していた。

すると、両手首と両足首に氷で作られている拘束具が付けられていた。

この手枷と足枷がはめられている状態では、さすがに抵抗することも難しい。

「……どうして避けようとしているのですか？」

「シャックル “Shackl^e” つまりは“手錠”。

拘束されるだけなら、その方がこいつらとしても話をしやすいと思いまして」

そう、メリリアさんが魔術を使う際に発する英語は魔術の内容を表していた。

最初から思い返してみると“Wind”つまりは“風”、カケ“Ca^{ウイン}ge”つまりは“檻”、アイス“Ice”つまりは“氷”、“Box”つまりは“箱”、“Compre^{コンプレ}ssion”つまりは“圧縮”と言っていた。

そのことを踏まえて考えると、魔術を使う人の声に注意しておけば対処出来る。

「それはどういう いえ、この話はあとにしましょ。

それで、建設的な話とはどういふことでしょうか？」

「簡単な話ですよ。

俺は自分のことを話すので、メリリアさんは俺に協力をして欲しいんです」

その言葉を聞いたはずのメリリアさんの表情は一切の変化も見せない。

俺の「*いつ*」とを予測していたのではなく、態と表情を変えなかつたのだね。つ。

交渉に於いて、相手にこいつらの利益、不利益を悟らせるのは拙いからである。

しかし、残念ながらこれは交渉でもなんでもないのだ。

交渉なら、こちらの田的を言つている時点でも俺の失敗に決まっている。

あえて田的を言つ¹とによつ、他の田的があるように思わせたりすることもあるが。

「内容次第ではタツヤさんに協力するのに^{やがてやがて}何かではあります。ですが、どうじて¹自分のことをお話しになるのですか?」

さすがにメリリアさんも、*「いつ*の意味のない問答を続ける氣はほとんどないらしい。

しかし、俺に接触した以上は立場的な意味での問答をしなければならない。

要は形式的に交渉をしました、といつ¹とにしておくのだ。

そうすれば、あくまで交渉により俺との関係を結んだことになり、^{メリリアさん}_{おれ}軍人^が不審者の提案に従つたわけではないといつ¹の面田を保つことが出来るのだ。

つまり、相手の田的を言つて当たった時点で、ある意味この交渉は俺の勝ちである。

「メリリアさんに俺が吐いた記憶喪失¹というのが嘘だつたと見破られてしまつたので、自分の正体を話すこと¹で身の安全と保証を願いたく思つたんです」

「……なるほど、分かりました。

それではタツヤさんのことと協力する内容について伺つてもよろしいでしょうか？」

交渉の基本もあるが、まずは相手が承諾しやすい状況を作るのがいい。

この場合は、あくまで軍人がこの状況を作ったのであり、不審者から軍人に接触を図つたのではないというこの方がお互いにとって利益になる。

仮に不審者から接触を図つたとしたら、明らかに何かしらの意図を持つていて。

そうすると、そんなやつと交渉しようとすると自体が国にとっての不利益となる。

さらに言えば、そんなやつと少しでも交渉を行おうとしたメリリアさんが、最悪の場合には国家反逆罪といった重罪の疑いを掛けられてしまつ可能性もある。

人質を取られたわけでもない上に、国家間の緊張が高まつていて今ではなおのことだ。

そう言つたことを考慮すると、メリリアさんの方から俺の吐いた嘘に気付き交渉を持ち掛けた、とこうことにしておいた方が円滑に話を進めることができるのだ。

「信じて貰えるかは分かりませんが、俺は異世界から来ました

」の返事は予想の斜め上をいつたのか、メリリアさんの表情が驚愕に染まる。

しかし、それも一瞬のこととメリリアさんは真剣な瞳でこちらを見てくれる。

「嘘、ではないんですね。

それで協力する内容の方は、異世界に戻ることでしょうか？

「やつです」

回答は予想済みですか。

「この世界に来た人もいるみたいなので、そういう経験があるのかもしれないな。

だとすると、以前に元の世界に帰る方法は発見されているかもしない。

それなら、こっちとしてはとても楽なので助かるのだが。

「分かりました。

私の名に誓つてタシヤさんの身の安全と保障を約束します」

名に誓つてとか、そんな大袈裟にやられても困るのだが……。

しかし、これで一応は交渉の真似事は終了だ。

メリリアさんが安全と保証をしてくれるので、色々と動きやすくなるだろつ。

それに協力もしてもらえば、帰られる可能性が格段に上がる。何だか順調にしているのだが、それが逆に恐ろしいと思えて仕方がない。

「あと、言っておかなければならぬことがあります。

「自身が異世界から来たというのは、出来る限り秘密にしてください」

「どうしてですか？」

俺としては、出来る限り協力者を増やしていきたい。

世界の仕組みが違う別世界に帰る方法が簡単に見つかるとは思つ

ていないのだ。

そのためには、利益になるか不利益になるかを見極めて協力してもらいたいのだが。

「大昔の文献から判断しても、異世界から来た人は強大な能力を秘めていました。

今は戦争前なので、タツヤさんの能力が利用されないとも限りません。

なので、『自身のこと』とは出来るだけ秘密になさつてください」

なるほど。

そういう利用のそれかたも考え得るのか。

こちらに来てから身体能力も向上しているし、あながち嘘でもないだろ？

「それとタツヤさんのことは両親以外知らないので、『心配なさらずに』

メリリアさんがもの凄くいい笑顔で言つてきた。

……つまり、この交渉はメリリアさんの独断で行つたことだから、メリリアさんの立場がどうこうとか国がどうこうとか余計なことは考えなくともよかつたつてことですか。

慣れない交渉で色々と考えた俺の時間を返して欲しい。

「ですが」

と、メリリアさんが言葉を句切る。

無駄なことをしたと肩を落としていた俺は、その言葉に顔を上げる。

メリリアさんはさつきの笑顔とも違つ、あどけない少女のようないい顔をする。

笑顔を俺に向ける。

「異世界から来たというのは2人だけの秘密ですね」

第14話 取り越し苦労の草臥れ儲け。骨折り損でも可。（後書き）

作「こんかいの“まとめ”
めりりあさん が きょうじょくしゃ に なつた 一.
龍「簡単に説明するところのことだ」
作「一行とか……。」
自分の苦労は何だつたのかと……（泣）
龍「骨折り損の草臥れ儲け？」
作「うわあああああああああああん
龍「……泣き方、古っ！」
作「それと、今回からこの出場者が増えます
メ「どうぞ、よろしくお願ひ致します」
龍「復活が早い上に唐突過ぎる……」
作「仲間になつたキャラはここ登場！
あと、何人増えるとか言つてもいいのだろうか？」
メ「そういうのはお止めになつてほうが良いかと
作「ですよねー」
龍「はあ……だんだんとここが混沌となつていくんだな
作「がんばれ龍哉！負けるな龍哉！」
メ「それはあまりにも無責任なのは……」

誤字・脱字の報告お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3283t/>

異世界には刀の花束を【改訂版】

2011年8月19日10時30分発行